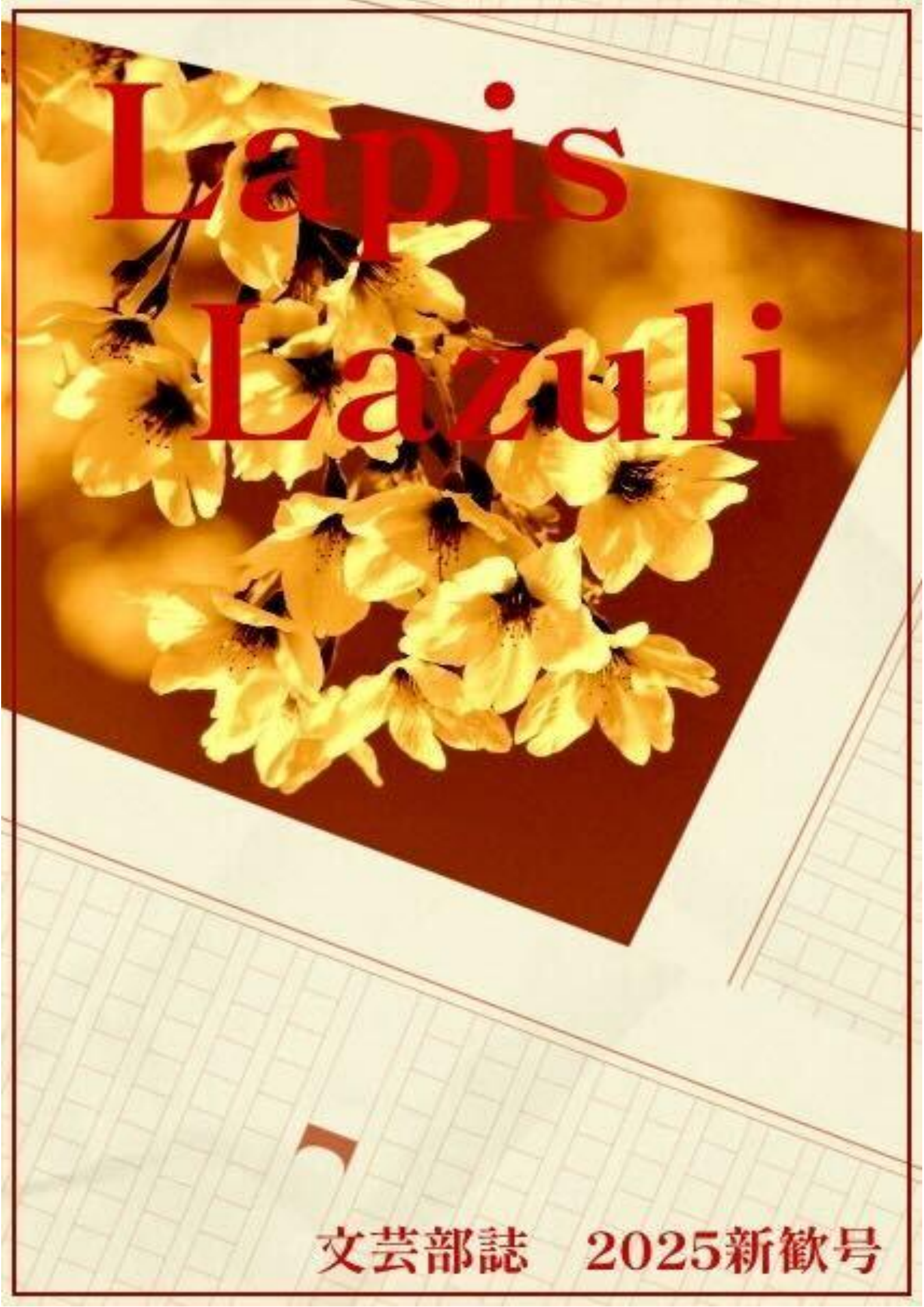




Lapis Lazuli

文芸部誌 2025新歓号

デート 午睡乃 ユメ……二十二

指揮者（さかな）

鳶
渡邊 夙葵
……二十五

ガクセイキブン

犠
 まい
 ……
 二十六

2月16日 (remix)

日々規
……三十

風になる
たぬし
……三十三

世界を滅ぼす前日譚 序章リメイク

くりや
⋮
四十一

わろん
:
二十一

主銃関係

中距離弾道炒飯
……五十九

うつろひ
宵蘭
……六十六

あとがき
……六十八

編集後記
……六十九

文芸部情報
……七十

夢見草

小島遊隼世

「ねえ、貴方は桜の別名って知ってる？」

自宅の最寄りにあるスーパーへと向かう途中、ふと見上げた青空の中に広がっていた満開の桜の花を目にした瞬間、遠い昔に聞いたそんな言葉が、頭の中にふわりと姿を現した。

ああまたこの季節が巡ってきたのだなと懐かしい気持ちになって、見えない何かを探すように、空に向かって目を細めてみる。毎年、この季節になると、こうして咲き誇る桜を見ると、この言葉が私を過去の記憶へと誘うのだ。

とはいえ、今となつては、この言葉だけが頭の片隅に残っているばかりだ。目まぐるしく変わっていく日々の中で、この言葉を私にくれた相手に関するそれ以外の記憶は、ほとんどどこかへ落としてきてしまった。

だからこの言葉に私はどう答えたのかなんて当然覚えてはいないし、どういう経緯でこの会話に至ったのかも、詳細には覚えていない。ただひとつだけ、確かに覚えているのは、この言葉をくれたのは高校の入学式の時、近くの席に座っていた女の子であり、後に私にとっての親友となった子だったということだ。

彼女は、私にとって大切な親友だった。大切すぎるくらいだった。誰にでも優しくて天真爛漫な彼女の存在は、間違いない私の高校時代の支えだったし、大袈裟なようだが、私の高校生活における光だったと言っても過言ではなかったと思う。けれど彼女の優しさは、全ての人間に平等に与えられるものだった。

それが、私だけに向けられるものだったなら。なんてことをほんの少し考えてしまった、その時から何かが壊れてしまった。十六歳の私は、ただ彼女の隣に在りたいと思っていた。彼女が一番心を許せる人間になりたいと思っていた。彼女の真っ直ぐな優しさを利用する人間が許せないと、何としてでも守りたいと思っていた。彼女の笑った顔が何よりも、愛おしいと思っていた。

けれど同時に、彼女に対してそんな執着をしてしまう自分のことが、ただひたすらに嫌だと思った。友情というには重すぎる初めての感情を、誰にも打ち明けられないまま抱え続けても平気でいられるほど、あの頃の私は視野が広くはなかった。

そんな大嫌いな自分のことをどうにか忘れてしまいたくて、高校生の頃のことはあまり考えないようにしながら、十数年を過ごしてきた。でも結局、大嫌いだった自分のことは、一番忘れなかったことはずっと忘れられないまま、彼女の笑顔や声や優しい言葉のような、好きだったところばかりを忘れていくの

だから本当に困ってしまう。

目の前の青信号が点滅を始める。赤色に変わる。気付けば私は住宅や店がひしめく通りまで歩いてきていた。先程まで見えていたはずの青空は大きなマンションのせいで一部が隠されてしまっているし、桜の木だつてここには一本もない。目線を近くに戻せば、隣で信号待ちをしている高校生二人組が、各々でスマホを眺めながらぼつりぼつりと何気ない会話をしている。

結局、彼女とは大学受験を機に話さなくなった。私の執着心が彼女を苦しめる可能性を考えると怖くて堪らなくなったからだ。あの時の自分の判断に後悔はない。けれど、もし彼女と出会うのが今だったなら、私はもつと上手く、彼女を大切に思うことが、傍に居続けることができたのではないだろうか。なんてことを考える度に、初めての感情に振り回されてばかりで何も知ろうとしなかった、あの頃の自分の幼稚さを実感している。

あの時、彼女に教えてもらった桜の別名は、今では何度考えても思い出せないままだ。ネットで調べればきつと一分もかからずに答えに辿り着けるだろうけれど、それは彼女との思い出を蔑ろにしてしまうようで嫌だった。なんて、結果的に彼女との思い出を手放すことを選んできた私が、そんなことを言うのはおかしいことだろうか。

「ただいま。」

玄関の扉を開け、鍵を鍵置きに投げると、同居している恋人がキッチンからひよつこりと顔を出してくれる。

「おかえりー。買い出し行ってくれてありがと、塩がないとなんにもできないからね、助かったよ。」

恋人は私の持っていたレジ袋を引き取ると、じゃあご飯作るからちよつと待ってて、と言いながらキッチンへと戻っていった。リビングでは、夕方のニュース番組が流れており、有名なリポーターがにこやかに桜の名所についてリポートしていた。キッチンから恋人の声が響いてくる。

「もうすっかり桜も満開だね。スーパー行く途中の道の桜も結構綺麗だったでしょ。」

「そうだね、もうすぐ散ってしまうんだろうな。あつという間だね。」

私がそんな返答をすると、少しの間が空いて、恋人がそうだ！と何かを思い出したかのような声を上げた。何があったのかと目を向けると、恋人は自慢気な表情で私を見つめていた。「さっき、今見てるその番組で言ってたんだけど。桜っていう別名があつて、そのうちのひとつに『夢見草』っていうのがあるんだって。短い期間に咲き誇って散っていく、永遠ではないその儚い美しさからそう名付けられたみたいだよ。なんだか素敵だったから、君にも教えたいなと思ったんだ。」

そう告げる恋人の笑顔は、あの時の彼女と重なって見えた。



水をやること

明倉有斗

毎日二回、水をやる習慣ができた。朝と夜に。

カーテンの裾から漏れ出してくる光のせいで、朝だと分かる。最近では目覚ましのアラームよりも先に目が覚めるようになってしまった。上半身を起こすと、まだ頭をぼんやりとした感覚が包んでいて、脳味噌を完全に起動するにはもう少し時間がかかりそうだった。身体にかかっていた薄手の毛布を剥ぎ取る。そういえば寝ている間全然寒くなかったな。部屋の空気は冷たくなって、もう春なのかもしれないと季節が変わる早さを実感してしまう。

ベッドから降りてフローリングにべたりと裸足をくっつけても、そこから伝わってくるのはぬるい温度だけだった。靴下を履かなくても生きていける時期って良い。ワンルームの部屋の中、キッチンまで数歩で到着して、昨日の夜にちよつと使ったままのマグカップに蛇口から水を出してためる。口をつけてカップを傾けると、柔らかい感触が唇に触れて、そのまま僕の中に入ってきて、静かに食道の形を教えてくれる。

喉の渴きを癒した僕は、マグカップを置いて風呂場に向かう。昨日の夜シャワーを浴びた後に換気扇のスイッチを入れるの

を忘れていたことを、そこでようやく気付く。まあいいか、と思いつながら僕は風呂場の扉を開く。大学生の一人暮らしにふさわしいくらいの築年数を思わせるように、扉からは少し耳障りな音がした。換気されていない、じつとりと水分を含んだ空気が風呂場の中から漏れ出してくる。電気を付けていないせいで薄暗がり広がるそこには、シャワーと、浴槽と、人がいる。

浴槽の中に横たわるようにしていたそれは、僕が風呂場の扉を開けて入ってきたことに気が付いてゆっくりと起き上がる。それは浴槽のふちに両腕をかけて、そこに体重をかけるようにして、僕の方へと軽く身を乗り出す。飼い主の帰りを待っていた動物のような仕草に思わずその頭に手を伸ばしたくなるけれど、思うだけで実行はしない。代わりに僕はシャワーに手をかけて、それにつながる蛇口を捻る。浴槽の中にいるそれに冷たい水がかからないように、水が飛び出してくる先を別の方向に向ける。シャワーヘッドを持つのと逆の方の手で、その水がお湯になるのを確認する。熱すぎも冷たすぎもしない、丁度良さそうな温度。大体いいだろう、と思って僕は浴槽の中で僕を見上げているそれに向き直る。相変わらず何の感情も読めないその顔、何の情報も与えてくれないその身体に、僕はシャワーを向ける。絞った水量で、柔らかく流れ落ちる細い水滴たちが、それにかかる。その髪、顔、肌のすみずみまでが濡れていく。僕の一挙手一投足を見つめていたそれは、ゆっくりと目を閉じ

る。水の温かさや感触が心地よいと言うように。ぺたりと浴槽の中で腰をついて脱力しきったそれは酷く無防備だし、何も意思のない植物のように見える。ただ自然の恩恵を疑うこともせず受け取り生きていくだけの存在みたいに。自然なんてスケールの大きすぎるものの代わりなんて荷が重い僕は、その身体全体に充分に水が行きわたったことを確認してから蛇口を捻って水やりを止める。

水やり。そう、この行為には水やりという言葉がいちばん近い。全身に水を浴びたそれは、満足したようにまた浴槽の壁にもたれかかっている。

それがどこからやって来たのか僕は知らない。それは、ある日突然僕の家の風呂場の浴槽の中に現れて、今の今までのすつかりそこに居ついてしまっている。初めてそれを見た時のことを思い出す。バイト終わりに疲れて帰って来て、それでも何とか風呂には入ろうとして扉を開けたら、浴槽の中に人がいた時の僕の驚きといったら。人間って死ぬほど驚いたら本当に腰が抜けるのだと身を持って体感した（できることなら一生体感しないまま死にたかったけど）。

人。人という呼称が正しいのかは未だに分かっていない。言葉は通じないし、浴槽から出てこないし、何も食べないし何も出さない。初めは気味が悪くてすぐに家から追い出そうとしたけど、何も着ていない他人の身体に触るのははばかられて、ま

るで手で触れずに何とかして虫を排水溝に流そうとするかのようにシャワーをかけてそれを動かそうとした。けれど、シャワーがそれにかかった瞬間、それはとても心地よさそうに目を閉じた。その様子を見て、僕の中から恐怖心とか気味悪さとか焦りとかは何故かすつかり消えてしまっていた。代わりに抱いたのは、赤ちゃんとか、植物とか、世界に対して何の抵抗もしようとせずただ何かを受け取り続けるままであり続ける存在へ抱くような感覚だった。それを追い出す気持ちですっかり無くなってしまった僕は、その時から今に至るまでそれをずっと浴槽に住まわせている。途中で警察という組織の存在を思い出したけれど、まあ別にいいかという感じで連絡してみる気も起きなかった。そうして僕には毎日二回水をやる習慣ができた。朝と夜に。

シャワーを元の場所に戻した僕は風呂場を出て、忘れずに換気扇のスイッチを入れて、軽く朝食を済ませる。昼から少し用事があったので、準備をしてその後外に出た。それまでの間、風呂場からは何も音がしなかった。僕が家にいない間、風呂場の扉を開けない間、それは何をしているのだろうか？僕のいない隙を見計らって、どこそこを歩き回ったりこっそり外に出ようとしていたりするのだろうか？

家に戻る頃には陽が落ちていた。食事は外で食べてきたから、後は風呂に入って寝ることくらいしかすることは残っていない

い。

服を脱いで風呂場のドアを開ける。朝よりもだいぶ水分の減った空気の中で、浴槽の中で、それは朝と同じように脱力している。心なしか朝見た時よりも肌が青白い。

それがいるせいで、僕は今年の冬を一度も浴槽に浸からないまま乗り切った。シャワー生活。どいてくれないんだから仕方がない。

適温に整えたシャワーを、それに丁寧にかけた後で、僕の身体にもかける。頭からお湯を引つかぶった僕は目を閉じる。温かい感触が、足の先まで滑り落ちていく。髪をかきあげて、再び目を開けた時に、横から視線を感じる。見下ろすと、全身水に塗れたそれが僕のことをじっと見上げていた。全て水に塗れた僕の身体を見て、まるで自分とおそろいだね、とでも言うように、その表情は満足そうに見えて、いつものように心地よさそうで、いつかこの風呂場に来た時と同じように急に消えてしまおうとしても、多分君のことは一生覚えてるだろうし、多分風呂入る度にずっと君に水をやり続けたことを思い出すんだろうななんて、よくそう考えているよ。僕は。

東京

明倉有斗

東京には人間が住んでいないと思っていた。

例えば、通勤路を早足で進んでいる途中に鳩蹴っ飛ばしてもそのまま気にも留めずに踏み続けてミンチにしちゃうとか、空気の薄い高層ビルから人の波を見下ろしてもそれを人間だと認識できずにただの小さな動く点でしかないと考えてしまうとか、東京の地名を日本の全国民が知ってるのは当然だけど都とか府のつかない県の地名はかろうじて県庁所在地ぐらいしか分らないよ、と平然と思ってるとか、日本の全ての地下には地下鉄が走ってると思ってるとか。そういう生き物しかないと思ってた。けれど、まあ大人になって一人で東京を歩いてみれば鳩は人間をミンチ製造機とも驚異とも思ってた様子で呑気にその辺をクルッポーしてるし、高いビルの中で働いている人にも普通に情はあるし、コミュニケーションも問題なくとれるし、熊本の地方紙の名前知ってる人だっているし、地下鉄は回転率が高いから意外と座れるし、通りをダル着で悠々闊歩してる人だっている。それに、みんなどこかで見たことのあるような顔をしている。今すれ違った人、〇〇に似てたな（有名な人じゃなくて、今まで人生の中で交友を持ってきた人たちの

こと）って思ってた振り返りそうになることも良くある。つまり心を失くしているわけでも特別でも何でもなくどこにでもいるような人間たちがただ生活してるだけの場所だってことだ。私が生活しているのと同じような感じで。

そんなことを東京で仲良くなった子に言ったらその子は顔をしかめて、それ熊本人って毎日馬刺し食べててくまモンの誕生日には必ず祭壇作るレベルでお祝いして辛子蓮根スキンケア代わりに肌に塗りたいくってるんでしょって言うくらい酷いよ、と返してくれたけれど、流石にそんなに酷くはないと思うんだ。

こでいばで飯テロ

霧雨 蒼

三月某日、自分の年を二倍にしてもまだ足りないくらいの男性からゴディバを貰った。掌に乗るくらいの小さな水色の缶きゆるんとしたお目々を持つ鳩のエンボスが可愛い。存外乙女趣味なのかもしれない。大したものをおぼえてはいないのにそれでもお返しをしなくてはいけないのだから、つくづく大変だと思う。それで、彼から感想文を依頼された。四百字、原稿用紙一枚分くらいで、チョコの味を文にしろと。本人としてはちよつとした冗談だったのだろう。ただ私の対抗心が見事に着火してしまつて、なんだか面白そうだという興味もあり、今こうして文章を書いているのだった。

缶の蓋を開けるとミルクワッフルチョコレート、ホワイトワッフルカモミール&ハニーチョコレート、ダークワッフルチョコレートの三種類が入っていた。包装をピリッと開けると、板蒲鉾のような形をしたクランチチョコがお目見えする。親指ほどの大きさだ。その気になれば一口で食べられそうなチョコレートに対してキュートアグレッションが湧いてくるのをぐつと堪える。フレンチやらイタリアンやらと同じことだ、クオリテイの高さを存分に味わえるほど舌が肥えてはいないが、とに

かく書かなければならない。自身の味蕾を鼓舞しながら口を開く。

ミルクワッフルチョコレートは王道と言うべき味だ。自然で程よい甘さが鼻に抜けていき、キメ細かなチョコレートが舌の上で溶けていく。他の二つよりも体温で溶けてしまいそうなほどにチョコが柔らかい気がした。

ホワイトワッフルカモミール&ハニーチョコレートは、まず色に驚いた。明らかに黄色い。口に含むと紅茶がふわりと香り、蜂蜜の甘さがホワイトチョコを引き立てていることが分かる。ホワイトチョコにありがちなくどい甘さは全くなく、まるやかな味わいだった。

ダークワッフルチョコレートはハイカカオなのだろう、かなりビターで苦味がある。糖分だらけの口直しに最適だ。嚥下してもほんのりココアバターの風味が舌先に残り、紅茶とバターたつぷりな焼き菓子が欲しくなる。

全体を通してパフがぎつちり密になっていて、軽すぎ重くもない。口溶けの良いチョコの反面ザクザク食感が強く、小さいながら食べ応えがあるチョコレートだったと感じた。

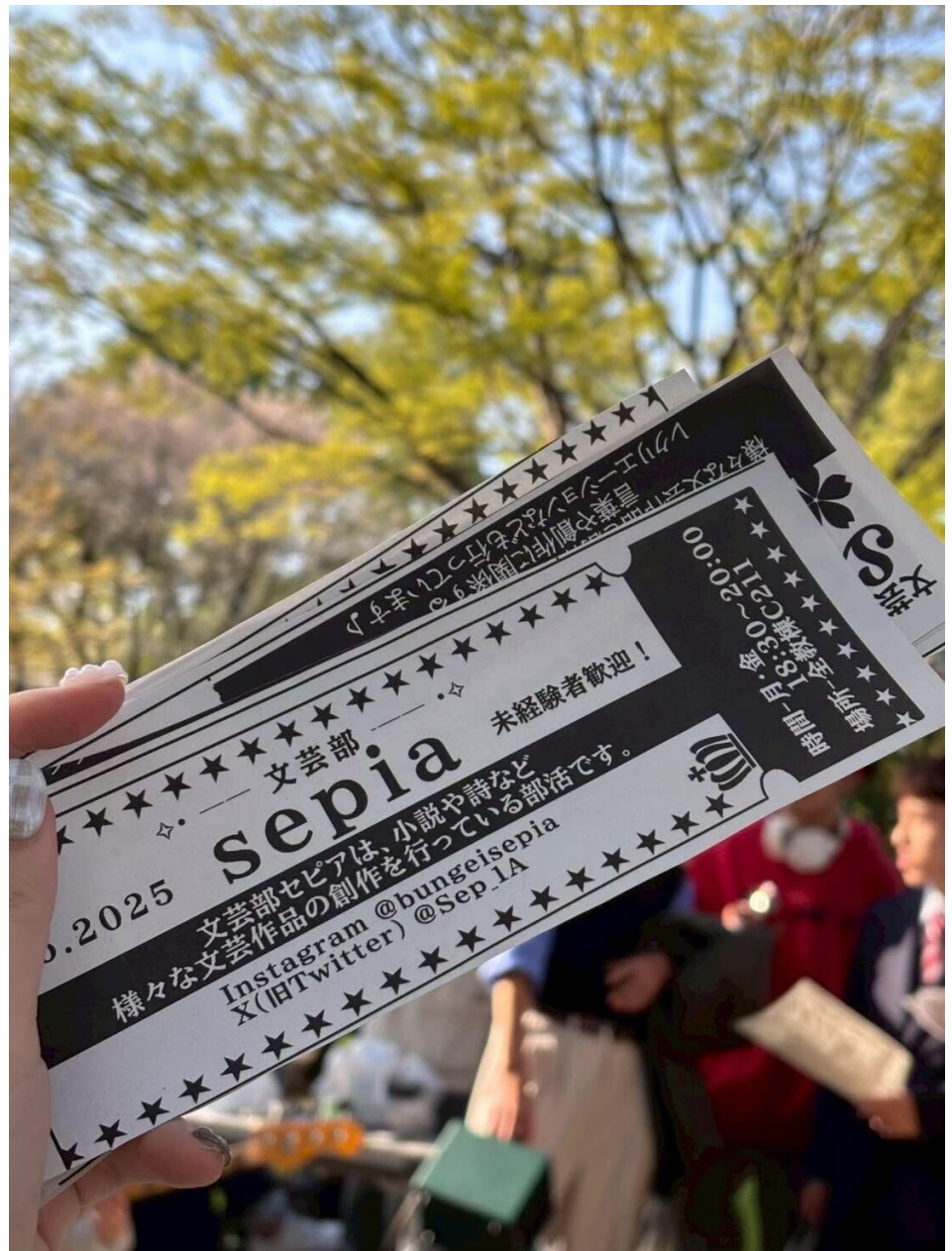
元も子もない発言をするが、別にモロゾフでもゴンチャロフでもメリーズでも良いと思う。バレンタインやらホワイトデー

に菓子を贈り合う習慣が出来たのも企業側の策略だとか言われているが、だから何なのだろう。やっていることはお歳暮と変わりはない。ホワイトデーにマシュマロを贈るべきではないとか、なんだかマナー講師みたいだ。雲みたいで可愛いのに。スモア、美味しいのに。テンパリングされて艶めいたチョコレートの表面は光を受けて、研磨された宝石の如く見える。贈る相手のことを考えて時間を消費することの、なんと愛おしいことだろう。

バレンタインデーとホワイトデーは二人の関係の確認作業なのだろうか。チョコレートが口内で溶けて、その間だけ息がほんのり茶色に色づく。かくかくしかじかを共有して、互いに歩んできた過去と一緒に見ている。それから人によつては未来を見るかもしれないし、そうでないかもしれない。家族、友達、先輩後輩、恋人、相手が何であれ、口にするには小っ恥ずかしい言葉を物に乗せる文化だと言うことを双方に理解しているからこそ、この時期はこの時期として成り立っているのだろう。愛の形に確かな保証のない中、意識下でも無意識下でも、やり取りをする相手に私が、貴方が、あの子が、脳の裏に過つたこととが、それが、たまたまなくかけがえのないことのように思える。それは金銭には代え難いもので、積み上げるのは時間がかかるのにたった一つ指先で押しただけで簡単に崩れてしまうジェンガみたいなもので、人によって価値が変わるものだ。小学生

が作るような、溶かして固めてアラザンで飾ったシンプルなチョコが、きつと誰かの心を燃やしている。チョコが喉に貼り付いている間、今が永遠に続くような感じがしている。いつかは思い出せなくなってしまう甘さを薪にしている。

——とまあ、こんなことを言っていると私にゴディバを贈った彼がいじめてしまいそうなので、ここだけの秘密にしておく。



今は花冷え咲くやこの花

霧雨 蒼

布団から出るのが少しばかり億劫ではなくなったから、ティッシュを捨てるのがスマホを触る時間並みに多くなったから、芽吹きを感じている。温くなった風が入ってくるのが心地よくもあり気持ち悪くもあり、頬の産毛が身動きする。壊れかけのインターホンは不協和音を奏でて、遠くない未来訪れるであろう死に怯えていた。延命処置を施せるドクターは私だけで、それを重々理解してはいるのに面倒だからという理由で延命を延期して、貴方は今幸せですかの問いに答える不要性を正当化していた。空っぽの郵便受けには今にも新しい郵便物「左手」が届きそうである。ドアスコープから見えた彼女は深淵を覗き込んで、ボロつちくてサビだらけで今にもホラー映画に出てきそうな大きなシャベルを手に、ちっぽけな鍵一つで崩れる分厚い鉄のカーテンの前で口を開いた。

「ねえ、山に行こうよ」

私達にとつて都合の悪いもの、たとえばうつかり割ってしまったママのグラス、赤点だった化学のテスト用紙、二の足を踏んでとうとう渡せなかったラブレター、だとか。それらを隠す秘密の宝箱を雪山と呼んでいた。誰が所有しているのかも分か

らない、整備されていない荒れ果てた裏山は未開の地だった。誰も足を踏み入れようとしなない場所には大抵、臭いものが蓋をされている。私達にとつてもそれは同じことで、なかったことにしたもの達のお墓がいくつも点在していた。もう正確な数字は覚えていないし初めて埋めたものは何だったかすら定かではない。掘り起こされた跡を探りながら記憶の道筋を辿っていく、さながら考古学者の気分だ。

雪山は未だ冬毛、純白のシルクを纏って、糸が紡げそうなほどに繭を形成していた。満開と言うには僅かに早い、自分の爪と似た色が視界の所々に見えている。引き摺られているのは重そうなシャベルで、ずりずりと地面を削って爪痕を立てる。隣の彼女は時期に似合わず暑そうにしている、首筋に汗の球を浮かべていた。二重、三重に捲られたジャージの袖が窮屈そうにしている、中途半端に開けっ放しのジッパは退屈そうに欠伸をしている。私の相棒は小さなスコップで、靴箱の奥から引っ張り出したときにはこれまたオンボロでサビに塗れていた。木漏れ日の隙間を縫って辿り着いたところは共同墓地だった。冷たくなったもの達が静かに眠っている場所、陽の光を拒絶して土と混ざり合って溶けたり溶けなかったりしている場所。墓石は一つもないけれど、じつと見つめればそこだけは牡丹雪になっていることが分かる。彼女は雪が積もっている場所に若芽色のブーツでシャベルを突き立てる。ザク、ともジャリ、

とも言えない、卵の殻を奥歯で噛み砕いてしまったときのよう
な、気味の悪い音が耳に張り付いた。彼女が今回世界から消し
てしまいたいのは真っ黒なポリ袋らしい。私と等身大、もしくは
はそれよりやや大きいかもしれない。中には何かが入っている
ようで、動かす度に重々しい音を立てている。私は彼女に続い
てベッドを作り進める。しつとりと濡れた土の匂いはいつ嗅い
でも変わっておらず、雪山が雪山であることを私に知らせてく
れる。

彼女の邪魔にならないようにちまちまと掘り進めていけば、
塵も積もれば何とやら、大きな穴は人間一人がすっぽり入れそ
うなくらいだ。彼女はそこにポリ袋をどさりと投げ捨てて、掘
り返した土を戻した。黒光りする独特な光沢感と質感はじきに
茶色に塗り潰されてしまつて、見覚えのある景色に逆戻りして
いく。動いているうちに限界が来たのか、彼女は途中でジャ
ーを脱いでコシヤツ一枚になったが、最近新しく買ったものな
のか私の脳内フォルダには存在しないものだった。横顔を優先
的に占める頬は咲いている花よりも赤く染まつて、流れる血液
を彷彿とさせる。そうして私達には新しく管理すべき墓が増え
た。あのポリ袋の中身には触れないということが、その場で察
することの出来た暗黙の了解だった。

墓を増やしたあの日から一週間後、彼女は消息を絶った。イ

ンターホンを鳴らしてもドアスコップを覗き込んでも彼女の
痕跡は見当たらない。洗濯物は相変わらず干されておらず、花
柄のリネンカーテンは取っ払われている。旅に出るにしては唐
突すぎる出立だったが、仰々しく騒ぎ立てるのも何だか躊躇わ
れた。アパートの隣にある公園では桜が一面に咲き誇っている。
昨夜の長雨で絨毯を作ってしまったものの、露を乗せた花
弁が八分ほどになってそれぞれ頭を垂れていた。目と目を合わ
せるとドアスコップを覗き込んだときと同じ光景が広がる。鏡
に映る私はぐわんと歪んでいて、顔が何倍にも膨れ上がってい
る。警鐘を掻き消すように、花卉の中心部から何とも言えない
香りが匂い立つ。暫く見つめ合っていると、ぼやけた鏡面は風
に煽られて滴り落ちた。

小中学生の卒業シーズンには似つかわしくない肌寒さに身
震いする。布団に逆戻りしたくなる欲望を堪えては、ストック
している栄養調整食品に齧りついていた。口内の水分が一気に
失われるのを水道水で流し込む。カルキの臭いが鼻に抜けてお
世辞にも満足な食事だとは言えないが、冷えきった部屋に青い
炎を灯す気分にはなれなかった。肥溜めと化した室内では気持
ちばかりの観葉植物が汚らしい養分を吸っていて、仄暗い光が
窓から差し込んでいる。以前よりも上から目線の太陽は安眠を
邪魔するための妨害装置だった。寝言すら言えやしない家では
羊のカウントを止めてしまった。水道料金の請求書が入った郵

便受けをまた空っぽにして新しい郵便物が来るのを待っていたが、届くのは無機質でつまらないゴミばかり。グロテスクな肉片のお届けは無期限に延長されて、そろそろ延命処置を行うかと鉛の腰を上げるくらいに皮肉なものだった。

独りで雪山に行くのは初めてのことだ。スコップはあのおかげから洗っておらず泥塗れで、捨てる予定だったスニーカーをいじらしくマーキングしていた。スニーカーに久しぶりに光を当てると右足部分が大きく破れていて、私の傷口をひそひそ突いて唆した。連れて行けと強請るそれを装備して、相棒を片手に雪山まで駆けていった。地を踏みしめて、雑草の命を踏み躪つて、恐らく目覚める寸前だったであろう蟻や芋虫の身体を丸ごとぐちゃりと押し潰して、脈動するものを蹴散らした。途中ぬかるみに足をとられて転んでしまつて、湿っぽくてべちゃべちゃの土と口付けをした。顔の半分ほどには泥が貼り付いて、袖で拭つても鼻をつんと刺激する腐乱臭が染み付いている。口の隙間から侵入してきた泥を追い出せば、粘性の液体と粘性の半固体が混ざり合つた物質が地面と接触する。ふと見た自身の爪の色はティッシュみたいく薄く白くなっていた。洗つても落ちない汚れ、私達が生み出した堆肥を吸つて生きていくのは雪解けを待ち望んだ邪鬼だ。

雨で土が流された結果雪は水になってしまつて、骨を頭にしたもの達が辺りには散らばっていた。その上から細やかなフレ

ークで多彩にデコレーションされた墓地は嘲笑されていた。墓を散々に荒らされて、為す術もなく空気と融合しては酸化していくガラクタ。私はそれら一つ一つにもう一度土を被せてやつて、深昏睡へと落ちていけるように祈つた。揺蕩う意識を閉ざしてあげて、涙の跡を拭いて、ふかふかのベッドを仕立てて、また雪が積もるのを待ち続ける。それから、掘り返した土の中ですやすやと寝息を立てていたダンゴムシに魔が差した。伸び縮みする甲羅の両端を持つて、本来丸くなる方と逆の方向へゆっくり身体を曲げていく。数えきれないほどの足がジタバタと無駄な抵抗をして、触角を左右にふるふる揺らして、やがて訪れる死に怯えていた。そのうちぷちんぷちんと何かが弾けるような音がして小さな肉の数々が断裂していき、身が詰まつた胴体からぷしつと透明な汁が飛び出して親指にかかった。いくつかの細い足が余韻を残した後にぴくりとも動かなくなつたそれを、また地中の奥深くに隠した。

辺りを見渡すと、暴かれていない墓が一つ、ぼつんと佇んでいた。雨に洗われてもまだいくらかこんもり膨らんでいて、雪ははだれになりつつも残っていた。それは最近も最近、ついこの間生まれただけの墓だ。静かに歩み寄る。微かに当たる日差しでじんわり滲む雪を押し分けて、ポリ袋が埋まっているであろう場所に手を当てる。冷たい。指先が紅色に染色されている。細胞が幾重にも重なつた皮を通して見る赤は雪との明暗を

甲斐甲斐しく彩って、ここの周囲だけ空気までもが凍りついて
いるような気がする。そうして、あの日目印にしたグリーンブ
ーツのように、右手のスコップを大きく振りかぶって、激しく
地面に突き立てた。

表面の薄膜がこじ開けられた痛々しい傷跡をそつと撫でる。
メスを入れる度に土からは水分が流れ出て私の体温を着実に
奪っていった。悴む指はスコップを握る感覚信号を脳へ届けら
れなくなっていたが、右手と相棒は皮膚がべろべろに爛れて一
体化したかのように貼り付いていた。降ったり寄せたりして押
し固められた地層が絢い交ぜになって、これまでの歴史を一緒
くたにする。ひとつまみのサビを隠し味に、広くて真つ暗な墓
は私の影が深く落ちることでも更に洞洞と闇を湛えていた。夢中
になって皮膚の本来の色が分からなくなってきたところで、が
つんと分かりやすい音が鼓膜を震わせる。灼けて引きつった指
をそつと伸ばす。あの滑らかさを見つけては、ずるりと引きず
り出した。

相も変わらず無機質なポリ袋は口を何重にも固く結ばれて
いた。苦しそうな結び目に優しく爪を立てる。鼻の頭に浮かん
だ球が次々にそこへ落ちていって、透明な玉が濡れた黒を歪め
て綻びを解いていく。一つほどけるごとに脂じみた嫌な臭いを
含んだ空気が漂った。ざあつと強い風が吹く。刺々しさを裏に
携えた温風が、咲く花々を巢立たせる。腐乱臭を誤魔化すため

の芳しさはどこに居たって私の背中を蹴り飛ばして忙しない
不安を駆り立てるもので、濁りなんて一切ありませんみたいな
顔をしてその実一番穢れている奥ゆかしさ故にままならない。
最後の結び目をほどけば、鼻が曲がるほどの強烈な臭いが墓地
を包みこんだ。肉色の花卉が見下ろす中、深淵をそつと覗き込
む。目と目が合う。彼女の屍体だった。霞んだ乳白色の魚眼レ
ンズは雌蕊のようにぬたぬた光って漆黒でもよく映える。表面
張力で湿度を含んだ球面では私の顔が酷く歪になって、あの日
スコップから見えた景色と逆転している。だらしなく半開きに
なった口には数本の濡羽色が侵食していて、頬の薔薇色は今や
すっかり失われていた。薄くて縦皺の寄った上唇の端は微かに
曲がっていて、今にも世界の禁忌を語りかけてくるような気が
した。秘密主義のビニールは体液すらも逃さず、水分を吸って
ぶよぶよにふやけた皮膚が所々ずるりと剥けている。触れたと
ころから崩れ落ちるであろうことは容易に想像がついた。指先
でポリ袋の中腹を撫でる。ビニールと触れ合ったときのぼやけ
た音の中にぐちゃりと水っぽい異質な音がして、一枚の境界を
隔てて静寂と孤独を伝えてきた。それは薄くも踏破されること
のない絶壁だった。

そのとき、奥底で何かが蠢いた。腕を伸ばして引つ掴む。ゴ
ムのような弾力と柔らかな感触に顔を歪め手を開くと、そこに
は蛆がいた。脂肪と似た色で水脹れのように膨らんだ胴を揺ら

して身体を伸縮させ、凍傷寸前の指先へと進んでいく。掌を上
下に振るとそれは簡単に地に落ち、また見窄らしく骸の方へと
寄っていった。実に無様で情けない様子だった。私はそれを見
て、嗚呼、春はとつくに来ていたのだと、初めて気が付いた。



夜に酒、朝にコーヒー

犧 まい

酒は零すつもりでグラスに注ぎなさい

一杯目

仕事、やめたんだ。

いや、うんま、確かに文字を書くことを生業にはしているよ。
(でも、締め切りに追われたり、法に追われたり、倫理に追われたり、流行を追ったり、それ、俺が書かなくてもよくねって
いう仕事もあつて自由は意外にないけれど)

悪かないよ。でもさ作家っていうのは職業名じゃないんだ。病
名なんだ。障害者手帳とか生活保護とかのりでお金をもらつ
てるようなもんだと僕は思ってるよ。そりゃ、最初からかける
やつもいれば努力して書けるようになった奴もいる、いっぱい
いる。でもそれってちょうど糖尿病と同じようなもんなんだな。
生まれつきか生活習慣によるものか。血糖値を下げるように覆
いつくす文字を必死に書き出しているんだよ。いや、うんお前
は偉いよ。仕事すること自体をやめたわけじゃないんだろ。次
の仕事見つける前にまた飲もうぜ、じゃあな。

二杯目

百時間かけて描いた絵は全然バズらないのに十分で描いた
てきとーな落書きばかりバズるって？ 結局楽にできること
が一番自分に身についているってことじゃないの。頑張って何
かをしてるってのは偉いさ、でもそれはやっぱりどこかで無理
してんだよ。雑にするのとは違ってさ、楽に思った通りにでき
るってことは自分が普段から大切にしていること、を理屈抜き
にできるってこと。九九ってあるだろ、あれだって最初は難し
かったはずなんだよ。でも計算するときにさらさら出てくるだ
ろ。あれと同じだよ。俺が10分で絵を描いても誰も目を向け
やしないさ。ってお前と比べるのもおこがましいな、へへさー
せん。ところでどこで数学追い付けなくなった？ サイン、あ
ーふよふよで聞いたことあるわ。俺？ 俺はね時計を読むとこ
ろでもうあきらめたよ。もちろん七の段は言えないよ。

春休み

わめん

檻に溶け背景となる

小学生もカゴを鳴らしている

一見さんの僕とあの茶店は閉まっている

桜が咲いている

消費の義務と人間でいさせてくれる権利をパンで買う

今日の西日は良い天気

だから燃えそうなもの全部詰め込んで檻にぶち込むんだ

明日は燃えるゴミ

背中には排水溝まとわりついた夢を流す

布団とレンズにこびりついた結晶を風呂掃除

小太りのおっさんが飯食ってる

残り九時間牡羊座の運勢は分からない

最初が一番マシだったよ全く

脳味噌を驚掴みにする君に

五度目のお早うを

デート

午睡乃 ユメ

海に行った帰りは

あなたの車に乗って窓だけ見つめて

帰るまですっとビーチが続いてる感じで

ずーっと真っ直ぐな海沿いで

ずうっとドライブしてほしい！って

変なビートに乗せて言っただけですね

リズムゲームが始まって

私が等間隔に音を出し続けて

あなたは真っ直ぐ運転するだけ

リズムが一度でも狂ったらね

あなたはハンドルを離して

一気にアクセルを踏んで

海から離れちゃうと思うから

絶対テンポを変えないように

力を抜いて頑張るのです



指揮者（さかな）

午睡乃 ユメ

暗い世界で

あなたは未来を見るのが怖い私のための指揮者です

あなたが何でできているかわかりません

私が望めばそれを探すこともできますが

それは網のようなものでしょうか？

もつと大切なのはあなたの目です

見て選択、保存と開く、排水溝

私はいつも感謝しています

私は一番の理解者になりたいです

だからあなたの水槽をきれいにしなければなりません

頑丈なガラスと肉の空気を

あなたの好みに合わせて飾ってください

あなたが見せてくれる場所はいつでも暖かいです

私の爪が剥がれていてもなぜ私は気づけないのですか？

聞かないでいつも包帯で何度もそう聞かないで

体が段々薄れてあなたが共鳴しなくなる

わたしかあなたも消えてなくなる前なら

オーバープロテクションが丁度良い

鳶

渡邊風葵

鳴き声の出し方を知らない彼らが
不器用に描いた螺旋の連なりを
ただこの目に焼き付けたいと思っている

飛ばなくなった鳶のことを考えている
意気揚々と飛んでいた彼は突然
見せびらかしていた羽を畳んで
他の誰にも告げることなく

茂みの奥へと消えてしまった
飛ばなかった鳶のことを考えている
もともと地上にいた彼は

獲物を横取りしているうちに
周りに誰もいなくなってしまうて
空で狩りをするしかなくなった
飛べなくなった鳶のことを考えている
高い枝から落ちて羽を折った
彼は知らず知らずに宙吊りで
もう羽ばたけなくなってしまうた

鳶たちのことを考えている
力強い羽ばたきに惹かれながら
抜け落ちる羽根を憂いながら

ガクセイキブン

儀 まい

よくわかった。ようやくわかった。俺は詩を書くことができない。書いたものからまたまたまい詩をもつててそれを感じてるだけ。この詩がいいとか悪いとか全く分からない。俺は詩でお金を稼ごうと思ってる。書かないと死ぬから。間違っているという言葉だけしか許可してない。俺はただ呼吸している。この表現がありきたりとかよい表現とか俺はすべての言葉が一期一会。詩として書くのが息苦しい。詩はなんでもしていいからなにかしないといけない。俺は今まで詩を書いたことがないこれからも絶対に詩は書かない。俺が話す言葉がたまたま詩に似ていただけ。俺が書くのは小説。大説でない。これが証拠だ。大切でない。俺が行くのは寺じゃない。教会だ。Not 禅問答 Yes 懺悔等。書いてしまったから詩なんてものが出来てしまった。俺から責任をとれ権利をとれ義務をとれ。意味が濃い浅いそれはあなたと世界の距離。怒ってる。言い知れぬ不安というのは例えば料理を運ぶときに落としてしまうんじゃないかと思うこと。助けてほしいけど何から助かればいいのか。救われるのか。掬われているのか。単食われているのか。願いを言えば目ん玉を取り除いて。涙を流せないのは瞳が邪魔をしているから。いつも鼻の奥に水が這入っているみたいだ。僕の子守は僕の仕

事だけで給料は出ない。ましてや残業代なんて。目の奥が痛くなくてもスマホを手放せない。何も見ないようにしたいから。叫ばないように。鼻と目の奥から脳漿を吐きそう。そう。スマホを見よう。吐いてしまうまで。そういうわけで僕の仕事はスマホに取られた。スマホの充電が切れるのを待っているGoogle なんでも話してくださいと言われる7:50 もう一週間もたったなんて言ってみたいあつという間に一日が過ぎるところか子供のときより一日が長くなる一回苦しい思いをしたのにまた、同じように今度は体を壊すために頑張りたくなくなる自殺をして僕はこれ以上になくくらい頑張りましたと言いたいだけの自殺甘くてどろどろとした誘惑自分を不幸だと認めないことがより不幸だった。夜に死にたくなくて。だって夜、night、knight、騎士、希死。這い寄るです。死にたいって書き込んでください。生きているうちしか言えないから。曖昧な自己紹介をしたと思ったらまた一人いなくなった。自分の気持ちを共感できる言葉にすり替える。情報を食べて食べていつも消化しきれなくてはいってしまう。怒られた時も声だけが空気が指先から肺を伝って夜を侵していく。なんでも知っているから知らないものは見えない。どこに旅行に行ってもガイドブックのことしか覚えてない。夢と現実には区別ない。いつも同じ自分が感じているだけ。頭が重いから横になる。起き方を忘れ、いつもどうやって寝てるんだっけ。嘘です。ふと、目を上

げると空が動いて見える。歩いてた。下を向いたままずっと狂っているのは僕か。いかれているのは僕か。力任せに小石を蹴る。跳ねてはねて左に逸れてコッソンと白い自動車に当たるとヒヤリとする。悪いのは僕、か。足跡を消すようにして帰路に着く。精神が着実にそして急速に崩れていくのを感じた。あまりにも早いせいかつみきを崩すみたいなカタカタと音が鳴る。ねえ知ってる精神が壊れるときってカタカタすんぢよって伝える人もいないのに。空を歩いているみたいだ平行間隔がないリスカした後って静かな夜の匂い。やらないといけないこともできる。音楽もぬくもりもいらない。痛いつてふわふわお布団。自殺のやり方と同じだけの年の取り方について。話したことじゃなくて話す人次第っていうのは救いなんだ、誰でもできる話をあなたしかできないってことなんだから。死にたいと言ったら病院行き。助けられているから助けてって言うてる。人語を解せるから話せないこと話さないことになる。なぜ苦しい。僕は悪くない。あなたも悪くない。正解は頭、ほんととは苦しくない。生きたいとか生きていけないとか生きていてもいいとかそんなんじゃないで落ちてしまった線香花火をカズバーナで燃やしているみたいな違和がある。灰色の世界というよりか燃え尽きて灰そのものだ毎日壁に話しかけるのは薄いから。暗いニュースが流れる。みんな幸せだからまた暗くなる前に踊ろう。目が悪い。めが悪いといっても視力が悪いということではあり

ません。視力はやすりをかけたように2キロ先の涙が落ちるのも見えます。現実をあまり見ていないということなのです。例えば、きれいな羽を拾い上げれば毛虫。毛穴を消そうと消しゴムでこすり。体をこすれば消しカスができて垢だし雪はふけだし。ただどスノードームの中じゃない。扇風機きれた。すみません、口が乾いているもので水を飲ませて下さい。君が煙草を吸っている間飴を舐めていたら新しく服をかわないといけなくなつた。しょうがないって言うって生姜ないから今日は鍋にしようなんて(サイテー。)唾をのむ。寂しくてあなた全てを私に溶かして一つにして。でも私の前で楽しそうにしないで。死にたそうに見えない。裂け目を合わせて細胞の一つさえよりも近くにいて。傷口を舐めて膿を増やして。あなたが安全ピンで開けてくれたピアスまだ塞がらないの。

牛乳を注いだらぽとぽとと落ちるし

六枚切れのパンはいつも一枚食べきれないし

レシピは二人分だし

冷蔵庫の野菜を喉かつぴらいて食べるし

冷凍庫には先週焼いたホットケーキが入ったままだし

プレートで焼き肉奉行しても食べる人はいないし

フライパンで焼いたのと変わんないじゃん

コーヒーに合うおやつを作っても頭いたくなりながら足がブクブク太くなるし

洗濯機は毎日回す必要なくなったし

ちよつと高いケーキを買って帰る理由もなくなった

思つてゐることはスマホの中で呟くしかないし

それは昔からでしょ

自分のやりたいようにすれば傷つくことも許容できる。傷つかないことはできない。だから自分が傷つくことに納得できるようにすべてを差し伸べてなのに認められないのは傷つくからね。だから自分を自分で作って自分のすべてが否定されないように。こんだけしているのにわかつてもらえないって勝手に傷つかないように。相手の反応はプラス加点で自己満足したいね。毎日伸びる髭を剃る、爪を噛む。髪を切つたと言われた。長いから切つただけで戻つただけ。短くなるのは一日長くなるのに幾月。ハツとする。目に髪がかかるなんて受け身じゃなくて。この人たちは髪を切るのだって自分の意思なんだ。自分になろうとして下着を買い、街に行くんだ。死にたいとどれだけ頭の中に浮かんでも死ぬことはない。きつとどんな形であれ命日は決まってるんだ。今日も今日が命日じゃないことを確認するだけ。どんな形であれ通り過ぎる人よりも緩くつながる。ここはインターネット。書き込みが行われたという事実以外は何も担保されていないから。消した画面に映るが真実。死にたいって言ってる人はいないんだよ。だから耳を澄ませても。



2月16日 (remix)

日々規

浴室に入る。床（浴室の床を「床」ということにしつくりこない）に水が残っていて靴下が濡れる。どうせすぐに脱いで洗濯するんだけど、それとは無関係に存在する不快感。天井の水垢が目につく。そのうち掃除しようと思う。やっぱりしないんだろうと思う。浴槽の底のゴム栓を足先ではめ込む。靴下がさらに濡れる。追加の（さっきの3分の1程度の）不快感。蛇口を捻る。熱水用と冷水用2つのハンドルが付いていて、その割合で温度を決める仕組み。手の甲に流れ落ちるお湯を当てながら調節する。手の甲には熱すぎるぐらいが、溜まった時に丁度よくなるのだと知っている。お湯が溜まるのを待つのが面倒で、もう服を脱いで浴槽に座り込む。体育座り。足を抱える腕。そこに生える毛が急に気持ち悪く思えて、脱毛しようと思う。どうせしないんだろうなと思う。水面は徐々に上昇する。水面に沿って体を切断したとして、その切断面の面積が大きいほど、水面の上昇速度は速い。水面に抜け髪が浮かんている。浴槽を掃除していいことに気づく。お湯（熱水と冷水それぞれ）を止める。腸骨くらいまで溜まったお湯を手ですくって浴槽の壁

にかける。洗剤を使う気にはならない。3すくいしてめんどくさくなりシャワーで洗い流すことにする。蛇口の横のレバーを倒してカラン（オランダ語）からシャワー（英語）へ切り替える。熱水用の蛇口だけを捻って壁面全体を流す。跳ね返る水滴が肌に付着して痛い。洗い終わってゴム栓を（今度は手で）外してお湯を抜く。ゴム栓を（また手で）はめて蛇口を捻る。再度手の甲で調節。肩が浸かるまでお湯が溜まり、その頃にはもう風呂から出たくなっている。数分耐えて出る。使い古して固くなったタオルから嗅いだことのない匂いがして動揺する。

昼下がりに神様がやってきて、ボソボソと何か呟いた。私たちは騒いでいたから、誰もうまきは聞き取れなかったようだった。本当は私は聞き取れたのだけれど、そのことは黙っていた。「日本人は死ぬと歩行者天国に行きます」と言っていた。

夕方。近所のスーパー。あなたはレジ袋（3円）に商品を詰めている。私は脇でそれを見ている。
「バナナって黄色いけどねちよねちよしてる」

あなたは20%引きナタデココをエコバックに入れながら
そう呟く。

「なんて？」

「バナナって黄色いけどねちよねちよしてる」

「黄色いけど？」

「そう。黄色いけど、ぬちゃぬちゃしてる」

牛豚ミンチをナタデココの上に乗せる。私にはあなたが何を
言いたいのわからない。

「なんで、けど、なの？」

「けど、でしょ」

ひきわり納豆をナタデココの横に入れる。

「そういうものでしょ、バナナは」

「そうだけど」

「じゃあ、けど、じゃないじゃん」

あなたは私の顔をチラリと見る。あごのニキビが潰されてい
る。

「嫌なの？」

「いや、うん、どうなんだろう。嫌なのかも」

ハッピーターンを牛豚ミンチの上に乗せる。

「それが何なの？」

「何っていうか、ただそうだったってだけ、バナナって黄色いけど
ぬちゃぬちゃしてるなって」

ぷつちよをひきわり納豆の上に乗せる。ぶどう味。気の利い
た返事を求められているのかもしれないけれど、そんなものは
思い浮かばなかった。私は腹が立ってきた。

「黄色くてぬちゃぬちゃしてないのって何？」

「え？」

「黄色とぬちゃぬちゃが問題なんですよ？じゃあ黄色くてぬ
ちゃぬちゃしてないのって何？」

あなたはしばらく考えていた。スーパーを出て家に着くまで
考えていた。エレベーターに乗っても考えていた。エレベータ
ーが8階で開いた。

「ピカチュウ（笑）」

私はあなたを殴り殺したくなった。

やかんが鳴っている。

呑みこんだばっかの肉うどんがもう吐きだされざつに並べ
られてる靴たちにかかる。胃酸が合皮のローファーを溶かした
くてしゃーなかったから。第二波が胸のあたりに停滞していると

店員がこっちに来てなんかいつてくるんだけどよくわからな
いから笑ってみてる腕を誰かに掴まれて振り返るとあなた
でこっちもなんかいつてんだけど理解できない。ぱくぱくと口
を動かしてんのが水槽の中の金魚みたいで面白いきがしたけ
どそのきはすぐどこかへ抜けてしまう。餌をあげなくちゃ。夏
休みに餓死させたメダカ（カマキリだったかも）。腕を掴んで外
に駆け出してくから引っぱられて一緒に走っていると夜風がま
あ気持ちいい。後部座席に押し込まれてエンジンがかかる。岡
村靖幸が歌う。

チョコレイト食べませんか？

君の答えはいつも

来月ショーがあるから今は食べれないのお

窓から顔を出してのこりのうどんとおさらばすればけっこ
うスツキリして風もいい感じだからそのままグダツつとして
ると電柱かなんかが鼻にかすった。車内に頭を引っ込めると急
に眠くなってきたからね。ねる！

夢。五匹の牛たちと海を泳いでいる。私の右の牛は脇腹を怪
我していて、海面は赤く染まっている。舐めてみると海水の味
しかなかった。私は潜って牛たちの乳房を絞る。赤と白が混

ざったら綺麗だろうなと思う。でも乳は海の底へと沈んでいく
だけだった。

目を覚ます。リビングの床の上。ビーズクッション（無印）
を枕代わりになっていた。後頭部の左奥がズキズキと脈打ってい
る。足元の方のソファーにはあなたが丸まっている。耳を澄ま
す。寝息は聞こえないから起きてるんだと思うけど、あなたは
じつと丸まっている。私が起きたことにあなたは気づいた。そ
のことに私は気づいた。そして私が気づいたことにあなたは気
づいた。そのことに私は気づいた。

あなたはソファーの背もたれをじつと見つめる。IKEAの布
張りソファー。白い糸と青い糸が織り合わさって上品な淡い空
色になる。麻を思わせるざらつきが心地よかった。あなたの視
線は糸の一本一本を辿る。糸と糸の交差。絡まり。白い縦糸が
青い横糸の下を潜る。次の横糸を超えてまた潜る。一本の糸は
さらに細い糸の絡みあいなのだと気づく。あなたの目ではそれ
以上細かく捉えることができない。あなたはそのことがもどか
しい。

風になる

たぬし

その惑星の地表のほとんどは砂漠であった。2万2000年の歳月を掛け、高度に文明を発展させたその惑星の知的生命体は、海岸付近に旧約聖書に登場するバベルの塔を彷彿させる、無数の高層ビルを建設し、そこで生活していた。彼らは文明の発達段階で、地表の化石燃料を全て消費し、かつて地表の8割を占めた広大な森林を伐採した。

まだこの惑星に緑が生い茂っていた頃、多種多様な民族が、各々の国を建て独自の法の下、生活していた。その多くは、火力発電により文明を発展させていた。

そしてある時、地表の極北に位置する国の、ある科学者が、核分裂反応の実験に初めて成功させ、彼らの文明のエネルギー源全ては、原子力発電へと移行していった。それは、ジル・クロム著、原子核の破裂を示唆する論文が「Atom」に掲載された257年後のことであった。

さらに、地表の7割が砂漠と化した頃、彼らが創造したロボットの人工知能が、彼らの知能を超えた。シンギュラリティである。そして、彼らの産業の多くをロボットが代替した。その結果、多くの者が職を失ったが、彼らの統治者たる存在は、

ロボットと彼らを包括する新たな価値分配体系を築き上げ、共存に成功させた。

現在、彼らとロボットの姿の違いを判別するのは、容易ではない。ロボットに人権が与えられて早100年、かつての様なロボット差別も無くなり、ロボット達の生活しやすい世界が作り上げられた。現に、ロボットは彼らと同じように喜怒哀楽の感情を持ち、就寝時は夢を見る。人権が与えられるのも今となっては、当然のことだった。

そして近頃、地表の西海岸に住む彼らの若い世代では、原始的な生活をする文化的運動が盛んになっていた。我々の文明で言うところの、カウンターカルチャーの様なものに近いのかもしれない。1960年代頃、かつて存在した北アメリカ大陸に位置するアメリカ合衆国の若者を中心に展開した、既存の文化や体制に反する文化、対抗文化である。

海岸から内陸の砂漠に若者たちは移住し、そこで、火力発電から原子力発電への過渡期に当たる文明相当の生活を行った。我々は、その内の一人である、ビートニという男に関心を寄せた。彼は17歳の時、30人程の同年代の若者と共に、生活に必要な荷物を担ぎ、内陸に441キロの地点にある、砂丘の畔へ向かった。そして、ビートニはそこに、一階建てのコンクリート造りの家を建てた。同じように他の者も家を建て、ある者は恋人と、ある者は友人と、ある者は兄弟と暮らした。当初、

ビートニは一人で暮らしていた。彼は、孤独を好む人間であった。彼がここに移住したのも、パノプティコンながら、全てが情報化された管理社会に窮屈さを感じていたからであった。彼は幼少期、歴史図鑑で知った、砂漠での、法や階級に支配されない生活を毎日夢見ていた。ビートニ達は、砂丘の畔に井戸を掘り、そこから汲み上げた地下水を基に、作物を育てた。それは、彼らがこれまで食べたどの作物より、味気の無いものであったが、彼らは自ら育てた作物を誇りに思い、そして味わった。

砂丘の畔に彼らが訪れて2年、村はマチドという名をつけられた。そしてその年、ビートニは初めて女の子と寝た。その女の子の名は、ゾーハルで、年齢は彼と同じく19歳、いつも村の喫茶店のカウンターで本を読んでいた。肩に掛かるほどの黒い髪、キャミソールにチノパンツを着て、厚底のサンダルを履いていた。そして、毎日異なったネックレスを身に着け、左手で煙草を吹かしながら、右手で本を読み、時折コーラ瓶を飲んだ。コーラ瓶の縁は、差し込む陽光に照らされた水滴によって、いつも輝きを放っていた。その輝きと相反する彼女の気怠い表情は、何とも神秘的だった。彼女の存在する周りを、いつも淡いオーラが包んでいた。

ビートニが初めてゾーハルに会った時、彼女は『潜在意識と夢』を読んでいた。ビートニはその日、農作業の休憩がてら、

土汚れた作業着と砂が付着して茶色く汚れた顔で、喫茶店を訪れ、ゾーハルとは席を一つ開けたカウンターに腰掛け、コーラ瓶を注文した。店員からコーラ瓶を受け取った時、彼の土汚れた右手と濡れた瓶が触れ、カウンターの机に泥水の小さな水たまりが生成した。それを、ゾーハルが紙ナプキンで拭いてあげたのがきっかけだった。男というものは、女に変に優しくされると、どうも勘違いしてしまうらしい。この惑星の知的生命体も我々と同じく。

ビートニはゾーハルに軽く会釈し、

「何を読んでいるの？」と質問をした。

すると、ゾーハルは吸っていた煙草を灰皿で押し潰し、

『潜在意識と夢』と言った。

「小説？」

「いや、精神分析学の学術書。今から432年前に書かれた本よ」

彼女はビートニに顔を向けず、本を読みながらそう答えた。

「なんでいま時、そんな昔の本を読んでいるんだい？」

「なんでって、面白いからよ」

「それに、私たちに潜在意識ってのがあっての初めて提唱したのが、この本の著者なのよ」

彼女はビートニの方を向いて、真剣な表情で続けて言った。

「ロボットにも潜在意識があるってのが、だいぶ前に話題にな

ったでしょ。私が生まれる少し前のことだけど」

「そうなんだ」

ビートニは、そう言葉を返すことしか出来なかった。彼は、あまり本を嗜む人間でなかったからだ。もっぱら、哲学だの精神分析学だの学術的な用語を話されると、いつも脳が受け付けず、思考が滞るのだった。

「あなたはどんな本を読むの？」

ゾーハルの質問にビートニは30秒ほど沈黙を置いて返した。実に長いこと本を読んでこなかったため、彼は記憶の斜面を滑るように、幼少期の記憶を思い出した。

「10歳の頃に読んだ歴史図鑑が最後に読んだ本かな」

「ずいぶん本を読まないのね」

と彼女は言った。そして、右ポケットから一冊の文庫本を彼に手渡した。その本は、『Technophobia』という本だった。

「どうせこんな所に居ても、暇なんだから本でも読んでみたら？　これは私が一番好きな小説なの」

彼女は愛想笑いをし、ビートニに本を渡して、飲み干したコーラ瓶を横のごみ箱に捨てて店を出た。ビートニは店を出る彼女の姿を、虚ろな目で眺めた後、彼女の捨てたコーラ瓶を眺めた。ゴミ箱には7本の瓶が捨てられていたが、ビートニには、彼女が捨てたコーラ瓶1本しかゴミ箱の底には見えなかった。

ビートニはその夜、彼女から渡された本をベッドに寝そべり

ながら読んだ。あまり本を読まないビートニは、同じページを何度も読み返し、頁を進め、そして52ページ読んで、ベッドの横の灯りを消した。眠りに付くまでビートニは、ゾーハルのことを考えていた。のちに彼は気づくことになるが、その時、ゾーハルを考えるに至った彼の感情の励起は、恋愛感情から来るものであった。

翌日、彼は朝の8時に目を覚まし、台所まで行き、冷蔵庫にある水をコップ一杯飲んで、ベッドに戻り、本の続きを一日掛けて読了した。本を読み終わった頃には、日は沈み、空には無数の星々が姿を見せていた。彼は時間を忘れ、読書に熱中していた自分に、ある種の感動を抱いた。気が付くと全身を空腹感が襲っていた。読書に熱中しすぎて食事を一切取っていないかったのだ。一気に押し寄せた空腹感に耐えきれず、更に、今から料理をする気力も残っていないかった彼は、喫茶店で夕食を取ることにした。喫茶店にビートニが訪れた時、そこにはまたゾーハルがいた。彼女はカウンターに座り、夕食を取っていた。皿の横には本が置かれていたが、昨日彼女が読んでいた本とは違った。

今度は、彼はゾーハルの横に座り、読んだ本についての感想を話し、そして、彼女の好きな本をまた貸して欲しいと言った。二人はその後、本の話の皮切りにお互いの身の上話や趣味など、他愛もない会話をしながら夕食を食べ、また会う約束をし、そ

れぞれ自宅に戻った。二人はそれから、週に三回ほど喫茶店で会い、会話をした。そのどれも第三者の我々からすると、退屈極まりないものであったが、二人にとっては違った。二人が出会って一か月と半月が過ぎたころ、二人はビートニの自宅で眠り、そしてその数日後、二人はビートニの家で生活を共にし始めた。朝起きて二人で朝食を作り食べ、顔を洗い、歯を磨き、作業着に着替え、日中は農作業をし、日が暮れると自宅に戻り本を読んだ。小説、哲学、精神分析学、史学に関する本をもっぱらだ。夕食は喫茶店で済ませ、風呂に入り、0時を過ぎる前に寝た。何の変化もない退屈な日々だった。しかし、二人はその無為な生活を楽しんでいた。

そんな生活を二年続けた、ある日のことだった。村に、来訪者が現れた。それは政府のロボットであった。彼らの来訪より数日前、西海岸のその国では、内陸への移住を行う若者の規制及び内陸移住者の強制帰還に関する法案が可決された。現れた政府のロボットは、抵抗するマチドの住民を麻酔銃で眠らせ、メモリ銃により内陸での生活、移住への動機そのものすら消去させた。無論、ゾーハルにもその矛先は向けられたが、ビートニには向けられなかった。それは、彼が戸籍未登録の人間であったため、ロボットの識別システムに反応しなかったからだ。ロボットが現れた時、二人は井戸水を汲み上げていた。ビートニがゾーハルの前に立ち、ロープで井戸水を汲み上げたバケツ

を持ち上げていた時、彼女の首元を麻酔銃が襲った。直ぐに、その銃声音にビートニは気づき、後ろを振り向いたが、既に遅く、ゾーハルは地面に倒れ込んでいた。二体の近づくロボットから、彼女を守ろうとするビートニの抵抗も虚しく、彼はゾーハルを失った。そして、ゾーハルはマチドでの記憶と共に、ビートニとの記憶も失い、最終的にマチドには、ビートニ一人残して、誰一人居なくなつた。それはビートニが、マチドに移住してから、9921本の煙草を吸い、104冊の本を読み、10950回井戸水を汲み上げた日のことであつた。

ビートニは井戸の前に膝から崩れ落ち、呆然と地面を眺めた。砂漠の砂は石英の微粒子からなっており、表面は酸化され、赤みを帯びた黄色をしていることを彼女に教えてもらった、1年前の夏の午後を思い出し、その記憶を掬うように、彼は優しく両手で砂を掬った。両手に積もった砂は、風によって吹き飛び、手元には、もとの半分しか残らなかった。もう一度、砂を掬い、そして同じ様に風が吹いて、砂は吹き飛んだ。それが実に9回繰り返された後、溢れんばかりの涙を彼は流した。それは頬を伝い、顎から一滴一滴地面に落下し、楕円形の窪みを形成させた。一通り泣いた後、彼は自宅に戻り、シャワーを浴び、着替え、ベッドに寝そべりながら、0時を過ぎる前まで本を読み、そして消灯し、寝た。眠りに付くまで彼は、彼女のことを考えた。彼女は自分の記憶を失ったこと、もう二度とここに戻って

こないこと、二年間の思い出。そのどれもが、記憶の戸棚から溢れ出て、彼の精神を襲い、深くその記憶の重みに押し潰された。しかし、不思議ともう涙は出てこなかった。そして、彼は幼少期の記憶の戸棚を開いた。物心付いたときに、両親に捨てられ、祖母はたった一人で自分を育て、困窮した生活の中でも常に食料を与えてくれたこと、そして祖母が日に日にやせ細っていったこと、管理社会の中で、戸籍登録されない程に、自分が身分の低い人間であることを。

そうして、彼が15歳の頃、祖母は死んだ。原因は明らかに、栄養失調と極度の身体疲労から来るものだった。肉もほとんど付かぬ祖母の遺体に、彼が最初にしたことは、その両目をそつと閉じてやることであつた。その数分後、保安局のロボットが祖母の遺体を処理しに現れ、祖母を離さぬと必死な孫から、哀れみの感情を一つまみも見せず奪い上げ、遺体をプレス機にかけた。ビートニは、祖母がプレス処理される瞬間を瞬きもせず、ただ茫然と眺めた。その光景は彼に、舗道に落ちた銀杏の枯れ葉を思い出させた。枯れ葉はいつも道行く人々に見向きもされず、踏みつぶされていたことを、そして、その枯れ葉が自分の祖母であつて、唯一自分を愛してくれた存在であつたことを。その日から、彼の中にはぽっかりと空洞が出来た。そして、その空洞を埋めてくれた存在が、ゾーハルであつた。しかし、そのゾーハルも、彼は失ってしまった。ビートニは自分が人に

愛され、そして、人を愛してよい存在ではなかったのだと深く思い、深い喪失感に二度侵され、もう何にも期待せず、何も求めようとしなくなった。普通の人間ならば廃人と化し、生きる気力も無くすことだろう。しかし、ゾーハルを失ったその翌日から彼は、何ごとも無かつたかのように、不思議と淡々に、これまで通りの生活を送つた。朝起きて朝食を作り、食べ、顔を洗い、歯磨きをした後、作業着に着替え、井戸で水を汲み上げ、農作業をし、日が沈むと喫茶店に向かい、キッチン冷蔵庫にあるコーラ瓶をカウンターで飲み、簡単な夕食をそこで作つて食べた。そして帰宅し、風呂に入り、0時を過ぎる前まで、ベッドに寝そべりながら本を読み、寝た。毎日1箱分の煙草を吸つた。

そんな生活を三年続けていたある日、我々は彼に接触を試みた。その頃にはもう、彼の生活は、順序が入れ違う事なく、最早、血の通わぬ程に、淡々としたものとなつていた。そこには、一切の感情を感じ取れなかつた。彼がいつもの様に作業着に着替え、家を出て、農地に向かつている時に話しかけた。

「やあ」

ビートニは驚きもせず、砂漠の、ある空間を見つめ、

「君たちだつたんだ、僕をずっと見ていたのは？」と言つた。

「そうだよ。でも何故分かつたんだい？ 我々は姿を見せてす

らないだろ？」

「でも分かるんだよ。そこに君たちが居て、僕をずっと見ていたことを。それで君たちはいったい何者なんだい？」

一瞬、砂漠に突風が吹いた。風が砂漠の砂を巻き上げ、砂塵を作った。ビートニは両手で顔を覆い、口に入った砂を唾ごと吐き出した。そして、恐る恐る両手を顔から放し、瞼を微小に開け、周りを眺めた。

「我々はただの砂漠の風だよ」

「風が話すわけないだろ？ 現に、君たちは僕に話しかけている」

「我々がか？ 君に話しかけているのは君自身さ。話しかけているのは、君の潜在意識そのものだよ」

彼は困惑した表情で、両目を開き、頭上の恒星を見つめた。眩しきで目尻付近の筋組織がやけに収縮した。

「君たちにはかなわないな」

ビートニの乾いた笑い声が砂漠に響き、そして、一瞬で重みを無くし、砂粒ほどの軽さに減少し、地表に落ちた。

「我々は君をずっと見てきた。それでだ、ビートニ。君はここでの生活で何を学んだ？」

ビートニは口を少し歪ませ、そして僅かに苦笑してから、こう言った。

「あらゆるものは、時の神秘の前ではどうにもならないことを

学んだよ」

「それはどういう意味だね？」

ビートニは、脳内の貯水池から、正確な言葉を掬い上げ、

「僕は、もう自分の祖母の顔も、ゾーハルの姿も、鮮明には思い出せない。絶対に忘れてはいけなくはないはずの大切な人ですら、人はいつか忘れてしまう。結局、時の流れの中では、人は無力に過ぎないんだ。それは、どれほど文明が発展しようと、決して覆せない」

砂塵は消え、彼の回りには、彼一人して誰も存在しないマチドの姿が顔を見せた。

「君たちに一つ質問していいかな？」

ビートニは、姿も捉えられない我々に尋ねた。

「何だい？」

「君たちにとって時間とは何なのかい？」

一瞬、大気が振動し、風が笑ったかのように、ビートニには思えた。

「我々は、ただの風に過ぎない。時の流れの狭間を、何の意味も持たずに彷徨っているだけだ。だから、我々には生も死も存在しない。時間という概念そのものが、最初から我々の中には存在しないのさ」

ビートニは、我々の回答に口角を上げ、瞳孔を開き、目に輝きを見せた。喜びの表情を見せていたのだ。

我々は、母星の言葉を引用して彼にこう言った。

「喜びとは、強烈で深遠な感覚であり、意識の全体を揺さぶる、自己超越的な充実感である。それは陶醉や至福、存在の恍惚にも等しい」

そして再び、突風が彼の回りを襲った。巻き上がった砂によって出来上がった砂塵は、数秒間ビート二の意識を混濁させ、思わず彼は地面に膝を着いた。そしてふと、彼は巻き上げられた砂の中から、拳銃が一丁、姿を現しているのに気づき、右手で取った。そして左手で地面を押し、再び地面に立った。

その瞬間、大気が微かに軽くなり、風が笑顔を見せた。彼もまた、風と同じように笑顔を見せ、こめかみに銃口をつけた。

「僕も風になるよ」

そう言い放ち、ビート二はそっと引き金をひいた。



世界を滅ぼす前日譚 序章リメイク

くりや

帝暦五〇六年。ヒノモト州ナキ村、山間の孤児院。

雨が降っていた。雷がうるさかった。風が目には沁みた。世界はごうごうと唸りをあげてうねりを成して、呻きを増していく。そんな世界に二人、俺とあいつはいた。

暗雲が空の限りを埋め尽くし、地上へ落ちる光を遮る。月も星もへつたくれもない、加えて目も開けられないほど暴れ狂う雨と風。自分の足元さえ確かじゃない。一寸先どころか現在地が闇の真つ只中だ。

だからこそ際立つ、異常。異質。異次元。

吹き荒れる風に長い白銀の髪が靡きもしない。宵闇の中に在って雷光を待たず輝いている。雨の雫も、泥跳ねも、果ては光の濃淡すら、世界から一切の干渉を彼女は退けている。

目の前の神様じみた少女——虎千代は依然として立ち尽くしたままだ。それもそうだろう。俺の右手には嵐が血を洗っている最中の刀。俺の背後にあるのは、無数の死体。

いや無数じゃない、三十七だ。この孤児院に生きていた、俺たちと同じ飯を食い、同じ風呂に入り、同じ部屋で寝た——仲間。

「ばかやろう——」

虎千代はそう独り言ちるように吐き捨てて、俺に迫る。水平の地面を垂直に落ちるようなスピードで、二人の間に横たわっていた数メートルが潰れる。

瞬きにも満たないコンマ数秒。空だった手にはいつの間にか

ロングソード

西方風の長剣が、俺の首を横薙ぐと十全に引き絞られていた。

無心。何かを思う暇は無い。頭が思考し命令を下す前に、実行する首から下は永久に別たれてしまう。故に身体が選択する。少女がここに到達したならば在るのは死。残された間合いがそのまま俺の命だ。

それを、一步。己から踏み縮める。余命はもう、無い。今まさに体の後ろ限界まで引き絞られた剣は解き放たれ、振り抜かれた少女の細腕は疾風の速度となって俺の首を刎ね飛ばす。

防ぐことは死。神の如き少女の力を持つてするならば、受けた刀と空間ごと、まとめて両断される。

躲すことは死。迫る刃を回避しても、俺は引き潰されて死ぬ。

まる

少女を球く覆う不可視のバリアを俺は知っている。この突進はダンプカーのそれと同じ。刃とバリア、二つから助かる範囲に逃れるには、死地があまりに広すぎる。

ならば、残されるは一つ。自ら死に行くほかない。

身体は選択する。右手にあらん限りの力を込める。既に動きだしたそれに左手が加わる。体幹も加わり、全身の力が乗算される。だが、全身だけでは足りない。目の前の戦神を殺すにはそれではまだ不足。

魂が脈打つ。霊力が漲る。全身で届かぬなら、全霊をもって届かせる。自分の持てる筋力も霊力も全ての力を刀に託し、刺し貫かんと稲妻のような突きをカウンターで放つ。

その技の名を、ヒノモト継承古流奥居合『一刀乃詰』。

見えない障壁を破壊する手応え。鋼と鋼が交差する。互いの鋼が命の淵に手をかける。貫く切先と横薙ぐ刃、稲妻と疾風、二つの必殺が閃いて――

――決着があった。敗者の首が夜空に舞う。血を撒き散らして、既に斃れた体の上にぼとりと落ちて二、三度、転がって止まった。

勝者の少女は茫然とその光景を見届け、頬に走った赤い一本線と右端だけ不格好に切り揃えられた白銀の長髪を確かめるように触れ――

「勝った奴がなんてツラしてんだ」

背後から声と襲いかかる白刃。慌てても乱れてもそこは戦神、咄嗟に出した左手でそれを防ぎ、距離をとる。

「チツ素手かよぶざけやがる」

強化した左腕に刻まれた痛みも、耳を打つその声音も、目に映る紅毛の男がそこに生きていると告げている。甦った男は濁った笑いを浮かべて言う。

「そんな顔してんなら――殺すぜ、正義の味方」

瞼の裏をスクリーンに、今日もまたあの日の上映を繰り返す。帝暦五〇一年。ヒノモト州エド県、塞地。

学校中に鐘の音が鳴り響く。追いかけるように、「掃除の時間です。生徒の皆さんは担当場所を速やかに清掃してください」と、校内放送が入る。校庭に、食堂に、礼拝堂に、演習場に――生徒が掃除道具片手に散っていく。

バシヤア、ガランガラン――神学△の教室に派手な音が反響する。バケツが床のフローリングに円を描いて転がった。

「おつとわりいわりい、きたねえからゴミかと思つて水かけちまった」

フラー

「蛮民のお前がきたねえ格好してるせいなんだからよお、お前が掃除やれよな」

ずぶ濡れの少女は何も言わない。頭にベチャリと付いた雑巾を払い除けることもしない。男子二人が野卑な笑いを浮かべて無抵抗の少女に詰め寄る。

シージャ

「なんだ？真民の俺たちになんか文句が——」

「そこまでだあ——！！」

ボクは思い切つて教室に飛び込み、覚悟を込めて叫んだ。

「まゝた邪魔しに来やがったな正義野郎、今日こそ痛い目に……」

……え？ なにしてんのお前」

「お前たちを止めに来た！」

「いやそうじゃなくて」

「弱い者いじめなんかして恥ずかしくないのか！」

「お前の方がよっぽど恥ずかしくないのか？」

「ボクは正義だ！ 他全員からおかしいって言われても、ぼくは裸一貫で立ち向かう覚悟だ！」

「やかましいわほんとに全裸じゃねえか！？ なんでフルチン！？ ちゃんと頭おかしいだろ——！」

いじめっ子の非難に胸を張つて堂々とボクは答える。

「トイレから駆けつけたからだ」

「ちゃんと拭いてきたんだろうなてめえ——！！」

「なんで上まで脱いでんだよ脱ぐ必要ねえだろ——」

「全部脱がないとモノが出て来てこない体質なんだ」

「知るか！ 黙つてろやクソみてえなクソ情報言いやがつて——！！」

「忘れたいことほど覚えちまうもんだろうが！ うわあ最悪だ、なんか忘れたい記憶あつたなりつてたびたび思い出すようになったらどうしようコレえ——」

勘違いのないよう読者諸兄に弁明したい。ボクはなにも、露出を好きでやってるわけじゃない。これはもちろん意図あつてのこと。このフル・フロンタル作戦はボクにいじめっ子たちの注目を集めることで、いじめられている子の安全を確保できる。さらに着衣時よりも動揺を誘えるため、暴力沙汰に展開する可能性が下がる。この場を誰も傷つかず収める合理的で完璧な解答、それが全裸なのだ。決して、好きでやってるわけじゃない。ほんと。

掴みは上々。フル・フロンタル作戦は第二段階に移行する。

「お前たち！ 彼女から離れろ——」

「お前も近づいていい格好じゃねえぞ変態」

男子二人といじめられていた女の子の間の割つて入り、策の

本命を行使する。

「良いのか」

「……何がだよ」

「ボクやこの子に手を出してみろ、ボクはお前らに脱がされて襲われたって叫びながら校庭を十周してやるぞ！」

「イカれてんのかてめえ……？」

二人が声をそろえて絶叫する。あんま叫ぶと他の人が来るからやめてほしい。これがフル・フロンタル作戦。最後にデメリットの追い打ちをかければ、リスクのあるいじめなどする覚悟のある奴はいない。

「明日からお前らのあだ名がケツ掘り3Pニキになるぞ！ いいのか！」

「お前は全裸ダッシュマンだけだな！ いいのか！？」

「おいもう行こうぜ、掃除とか放っておいてもいいだろ」

「ああやべえよこいつ……キモ……」

そう言ってクラスメート二人は手にしていたモップとホウキを打ち捨て、神学教室を後にした。

ガラガラ、ピシヤンと戸の音が教室に響いたあと、ボクはへなへなと膝から崩れ落ちた。

「はは……」

力のない笑いが達成感でいっぱいの中から溢れ出す。ボクはやり遂げた。成し遂げた。ジブンが正しいと信じたことを挫け

ずに貫けたんだ。湧き上がる喜びを全身に浴びてボクは後ろを振り向いた。

「もうだいじょう……」

——ボクが守り抜いたはずの彼女はそこにいなかった。代わりに水たまりから濡れた足跡が点々と窓まで延び、雑巾が半開きの窓辺に寂しく落ちていた。ボクはここが一階でベランダから外に逃げられることを思い出して、雑巾を拾い四人でやるはずだった掃除を一人で再開した。さむい。

去年、世界は一つの国に統一された。我らがアルトリウス帝国は遂に地球の全土をその統治下に治め、かつて「国」だったものは「州」となり、武力は他国と争うためにあった「軍」から帝国の平和を維持する「騎士」になり、そして世界から戦争が消えた。

十二歳のボクは最後の征服地ヒノモト州につくられた「塞地」(帝国騎士団と聖剣教会が各地に置く拠点)にある聖ヒノモト第一学校に通っている。

当然ながら教育機関をつくる権利は教会にしか認められていないので、まだ塞地がこころ一つだけのヒノモト州ではウチが唯一の学校だ。きつと数年もしたらあちこちに塞地が出来て

フラー
蛮民も学校に通いやすくなるだろうけど、今は帝国でちゃんと
した職に就こうと思つたらここに来るしかない。

フラー
だからヒノモト州全土から蛮民が集まる。帝国本土から来た

シージャ
ボクラ「真民」と征服された土地の人々「蛮民」は半々くらい
でこの学校に通っている。

シージャ フラー
この学校で、どこか世界中で、真民は蛮民を差別していじ
めている。

ボクはそれが許せなかった。だつて福音書には「教えを信じ
る者は皆平等だ」、そして「強き者は弱き者を守りなさい」つて
書いてある。皆そう教えられてきたはずなのに無視して酷いこ
とをしている。

それでもボクだけは正しく敬虔で、正義であろうと、そう決
めていた。

掃除を一人で完了する頃には礼拝の時間が始まってしまっ
ていた。ボクは大急ぎで服を着ながら校舎に隣接する礼拝堂ま
で走り、聖剣教会のシンボルである剣十字が描かれた大きな扉

の前で荒い息を整えた。怒られるかなあ、怒られるだろうなあ、
と重い気分で重い扉を押して入ると、壇上の司祭様と目が合っ
てしまった。

「今入つて来た君。名前は」

「……ロックウエルです」

「ロックウエル。君には信仰心が足りないようだな……フン、
早く席に着きなさい」

居心地の悪い視線に晒されながら席に急ぐ。席に着いても何
だか落ち着かなくて、縮こまったまま福音書と教本をすぐさま
卓上に出し誤魔化すようにページをめくった。

「さて、続きた。先史時代の人類は驕っていた。神への畏れを
忘れその座を奪わんと天に届く塔を造った。お怒りになった神
が神罰の代行者として地上に遣わしたのが、真祖アルトリウス
である」

司祭様は壇上から降り、ゆっくり歩きながら話を続けた。

「真祖アルトリウスは龍に変じて人類の創造物全てを破壊さ
れた。それがアルマゲドンであり、それは我ら人類の罪の贖い
であった。しかし無力な存在となり犬にさえ狩られるに堕ちた
人類を真祖は哀れまれた。そして混沌の世を生き抜く新たな火
を人類にお与えになった。それが……」

司祭様は礼拝堂の真ん中辺り、ボクの席のすぐ横まで歩いて
きて足を止めた。思わず強張るボクをよそに、司祭様の視線は

右隣で船を漕いで居眠りをする蛮民フラーの男子生徒に向けられていた。

司祭様が彼を指差して「アクア・カヴェエ水の檻ア」と唱えた。瞬間、何もなかったはずの空間に突如として現れた水の球が彼の頭部を丸ごと呑み込んだ。

「蛮民フラーごときが居眠りだとか？私の話は退屈か、ええ？ならば私の魔道をその身で味わって学ぶがいい」

彼は必死に藻掻く。頭を振り乱し、水球を掻き分けて悶える。けれど大きく開かれた彼の口から出てくるのは気泡ばかり。声は聞こえず、誰にも届かない。彼と視線が交わる——その寸前にボクは全力で教本に目を落とした。バクバクと心臓が叫び声を上げ、嫌な汗が頬を伝う。クスクスと嘲る声が礼拝堂のあちらこちらで上がった。

「そう、魔術だ。厳密には魔道と霊道に分類される。かつて人類が知覚できるのは目に映る物理のみであり、かつ意思の力によつて操作できるのは己の五体のみであった。

真祖バプチスモスの啓蒙を受けた人類は次なる段階へと進化した。この世界を循環する『存在エネルギー』の知覚と操作が可能となつ

たのだ。福音書の記述を引用するならば、『肉体の枠を超越した現実へのアクセス権拡張』。それが魔術の定義だ。『霊力』——生き物が魂に貯蔵する自身の存在エネルギーのことだな。身体を媒介とせず霊力に意思で指向性を与え、直接現実に干渉するものを『魔道』、身体、または剣などの道具を身体の一部と見なし、媒介として干渉する『霊道』。この力こそ我ら人類が真祖から賜った寵愛の証明に他ならない」

床でのたうつ男子生徒に目もくれず司祭様は続ける。

「後に第二代皇帝となるカストゥース帝は、弟子として直接真祖から魔術と福音の教えを受けた。その教えで世界を満たす高潔な理想のためにアルトリウス帝国は建国され、そしてついに昨年……五百年に渡る我らの悲願は果たされたのだ……」

感極まった司祭様が首から下げた剣十字のロザリオを握って涙を一筋流す。その足元ではもう藻掻くことすら出来なくなった男子生徒がビクビクと痙攣している。

司祭様はフンと鼻を鳴らし、彼を一瞥だけして蹴飛ばし

「レコペラーレ」と吐き捨てた。

「がフツカツはあつはあつ……!!」

蹴飛ばされて転がった彼が急に息を吹き返し、激しく咳き込みながらも必死に酸素を肺に取り込もうとする。

踵を返して壇上に戻る司祭様が忌々しそうに彼を睨みなが

ら告げた。

「貴様ごときが司祭級修道士たる私の回復魔術を受けられる幸運をよく噛み締めるのだな、汚らしい蛮民が。さあ帝国臣民諸君よ、神に祈りを捧げよ。真祖アルトリウスに感謝を捧げよ。我らの皇帝に忠誠を捧げよ。エイメン」

エイメン。皆の声が揃う。ボクも皆と同じように手を合わせて、目を瞑った。

——なにも、できなかった。

礼拝が終わって生徒たちが下校していく。塞地にはボクらの学校の他に、騎士が駐屯する城塞や修道士が祈りを捧げる礼拝堂などがあるが、敷地内にはここで働く人々の居住エリアも用意されている。

この塞地にいる真民は基本みんなそこで暮らしている。蛮民はさらに大通りを行った先にある、大門から塞地の外に出てそれぞれ別の家に帰っていく。

つまりこの時間、下校する生徒たちは一斉に同じ帰路を辿ることとなる。ボクもその例に漏れず、大通りを人の群れに流さ

れながら歩いていった。

不思議な気持ちだった。なんというか、川の水面に揺れる葉っぱみたいだ。地に足なんてついぢやない。けど、ふわふわとした心地よさに身を任せてきれいな空だけ見ていれば、それでいい気分なのだ。

泥と朽ち葉まみれの川底さえ忘れておけば。

後ろを振り返ったのは偶然だった。その女の子には見覚えがあった。彼女はボクが掃除時間に体を張って助けた蛮民だ。い

じめっ子に建物の裏手へ引つ張られて消えていく彼女を視界に捉えつつ、やっぱりボクは人の波に流され続けた。

結局、何も出来ないまま、家の前まで流れ着いてしまった。いつもどおりの家。安心してくれるボクの家。どんな迷いがどんな気持ち悪さが胸にへばりついていったって、いつもちつとも変わらずに温かく迎えてくれる。

目を瞑って考える。今日は嫌なことが沢山あった。もう見たこと全部忘れて、甘いチョコレート食べて、ごろりと横になって、毛布にくるまってよう。そしてそのうち。パパかママかが帰ってきて、楽しい話をしながらご飯を食べるんだ。そうすれば、きつと夜には気持ちよく眠れる。明日にはまたいつも通りの朝がやってくる。問題なんて無いんだ。それでいいんだ。それがいいんだ。だって、みんな、そういうもんだろう？

そう思つて、目を瞑つたままドアノブに手をかけた。

「あら、ロック。今帰りのの？」

ビクリと肩が震える。なぜか喉がキュツと絞まつて、見開いた目に玄関と庭先の地面が映る。振り返ることはできなかった。「おかえりロック。あのね、今日はロックの誕生日でしょ？だからパパとママお仕事早く終わつてお買い物に行つてきたのよ」

「え……」

驚きに突き動かされて思わず振り向いてしまう。いつもは夜遅くにしか帰つてこないパパとママが、揃つてはち切れそうな買い物袋を両手に提げて立つていた。

「今日は久々にパパが料理作るからな！ロックの好きなドデカハンバーグで、今夜は十三歳のお祝いをしよう」

二人の笑顔を見ていられなくなつて、ボクは弾かれたように走り出した。後ろで二人が大声でボクを呼んでいるのが聞こえて、遠く小さくなっていく。まだ下校する人も多い大通りをボクは流れに逆らつて走り続けた。

「ああ？またお前かよ」

「んだよ、文句あんのか！？」

息切れが体の中で反響している。汗が足元の土に吸い込まれ

て黒いシミになつては消えていく。凄む真民の男子二人の足元

フラァー

に蛮民の女の子が倒れていた。

建物の影になるこの場所は前日の雨のせいでまだぬかるんでいた。女の子の顔や服は半分ほどが泥にまみれ、その子の物と思しき麻のカバンは二つにちぎれて茶色の水たまりに沈んでいた。中身の教本の表紙には靴底の模様がくつきりと刻まれている。

女の子は何も言わない。瞳にはボクの姿が反射しているのに、その目は何も見ていない。辺りに争つた形跡もない。彼女はただ何もせず、暗い泥の中に倒れていた。

「オレのパパが言つてたぜ。お前、頭のおかしい医者夫婦んと

フラァー

この息子だろ？ 異教徒とか蛮民も、フツウとおんなじように

フラァー

治す変人だつて。ヘッ、蛮民なんか助けるなんてばっかじゃね

えの？」

ボクは何も言わない。ただこみ上げる気持ち悪さのままに睨んだ。

「……チツなんか言えよ！！」

蹴りを腹にもらつてよろけ、ぱしゃんという音とじんわり広

がる冷たい感触でお尻が泥で汚れたことを悟る。それでも睨み続けた。

「つなんだよお前！ 気持ちわりいんだよ……！」

シージャ

フラァー

「真民のくせに蛮民の味方なんかしやがって……！ お前なんか

コイツと同類だ！ 蛮民野郎が……！」

フラァー

口々に罵声を浴びせながら二人はボクを蹴り続けた。蹴りの雨に齒を食いしばって耐える。耐えるボクと、横たえる彼女の目が合った。

フラァー

思えば蛮民の人間と目を合わせたのはこれが初めてのことだった。あんなに同じ場所で、同じ時間を過ごしてきて、ただの一度も目が合ったことはなかったんだと、今気が付いた。

「やめなさい……！」

爆発音のような怒声が響き渡り、そしてシンと静まり返った。

「……ウチの子に何をする。——大丈夫かロック、頭は打っていないか？ 視界は正常か？ どこか痛むところは無いか？」
パパがボクの顔を覗き込む。ハンカチで泥を拭いながらあちこち触って、ボクの怪我の具合を確かめているらしかった。

「「につにげろ……」

いじめっ子たちが走り去って、この場に三人だけが残った。

フラァー

パパは一通りボクの怪我を確かめ終わったあと、蛮民の女の子を見て「なるほど」と漏らした。

「大体の状況は分かった」

パパは女の子の手を取って身を起こさせ、ボクにやったようにして泥を拭い、それから手帳を取り出してペンを走らせた後女の子に視線を合わせて膝をついてページをちぎって握らせた。

「君。もし何かあったらここに来なさい。私の住所だ。医者としてか……一人の大人としてなら、力になれるだろう」

行こう、とパパに促されて立ち去ろうとして、

「あ……」

消え入りそうなか細い声に足を止めた。振り向いたボクらの視線にビクリと肩を震わせる様子は、さっきまで人形のように無反応だった少女とは思えないほど、人らしかった。

「あ……ありがち、う」

たどたどしい本国語で紡がれたたった五文字の報酬が、それでもボクには十分すぎた。

パパの真っ白いズボンは膝をついたせいで汚れていたし、ボクもあちこち傷と泥まみれだったけど、それでもまっさらな制

服の時よりずっと晴れやかだった。

「ふん！ ふん、ふっ！」

訓練用の木剣が空を切る音と、口から漏れる気合いの音が庭に響く。

強くならねば。誰にも負けないくらい、自分に負けないくらい。今日を毎日にするにはそれが必要だとあちこち痛むこの五体が主張している。

自分の身体を支配しているもの、これは焦りだと自覚する。背中に迫る何かに駆り立てられて、それを振り払いたくて、今必死に剣を振っている。

もう二度と負けてなるものか。次負けたら今度こそ終わりだ。今日、そこで両親にばったり出会わなければ取り返しのかないことになっていた。言うなれば、そう、ボクは——死にかけていたのだ。

『死』。大袈裟なようで、ちっとも過言じゃない。崖っぷちを背にしているようなこの感覚を言葉にするなら、その表現がきつと一番正しい。

もし。あの時何事もなく、両親に呼び止められず家に帰っていたら。きつと普通に明日はやつてくる。いつもと変わらない日常は続いて、ボクは笑っている。

それでもボクは死んでいる。そのもしもの世界のボクはボクじゃない。決定的に何かが違う全くの別人で、ボクであるための重要な何か欠けている。

今までの、今ここにいるボクはこの庭先で、もしくはあの礼拝堂で死んで、永久に喪われていた。

それは、たまらなく怖い。背中に冷たい電流が一筋、ぶるりと身震いを誘う。意識を思考の海から現実に戻して素振りに集中する。ギリ、と木剣を握る両手に力をこめる。

「えい、やあつ、とりや！——つと、くそお……」

剣の重力を感じなくなった代わりに腕そのものが鉛になったかのような、疲労も限界といった感覚に襲われながらも、それでも無理矢理に素振りを続ける。

「ボウズーそんなへっぴりじゃあ騎士見習いにだってなれねえぞおー」

お向かいに帰ってきた酔っ払いのおじさんが野次を飛ばしてくる。偉そうなこと言って、おじさんだって万年二等騎士で見習いと階級二つしか変わらないくせに。

「っふんっ！！ あっ？」

力を無理に込めて振り下ろした剣は、手からすっぽ抜けて回転しながらその先へと飛んでいき——ガシャン。

庭の隅にあった鉢植えに突っ込んだ。

「ひいっ——」

血の気が引く。冷たい電流が背中に何百本も走り回り、もはや滝のように感じる。まずいほんとに死んだ。これ、ボンサイっていうママがすごく大切にしてる――

「ロックー？ もうご飯よ？ 帰ってきなさい」

ま ず い

玄関のドアに近づいてくる足音がする。きっと怒り狂う、バレたら死ぬ！ どうか気を逸らさなきゃ、どうにか注意を、どうにか――ガチャリ、と無情にもドアノブが下がり――

「ロック？ 何やってるの？ 飯……………何やってるの」

「いつ、一発芸……」

ボクは裸になった。視線を集中させるにはこれがいいと実証されている。

「……NAROTO 疾風伝第壱話より、ナ〇トの分身の術……」

パンイチで印を結ぶボク、隣に脱ぎ散らかった服、真顔のママ。沈黙の庭に三月の風がヒューと吹いていた。

「早く服着なさい」

「はい」

――バレなかったからヨシ。代わりに何かを失った気がする。

「せーのっ」

「誕生日おめでとぅ、ロック」

温かなスープと大きなハンバーグ、他にも並ぶ馳走の数々。思わず目が輝く。塞地のお医者さんとして毎日忙しい両親が一緒に食卓を囲むのも久しぶりだった。

「いただきます！！」

「デザートにケーキもあるからその分のお腹空けときなさいよー？」

「うん！」と、既にチキンを口いっぱい頬張りながら答えるボク。「もう」と苦笑するママ、何も言わずただそれを眺めて碧い目を細めるパパ。一番幸せな時間がゆっくりと流れていた。

「そうだ、ボク今日^{フラァー}蛮民の子を助けてあげたよ！ みんな蛮民^{フラァー}

をいじめるけどね、パパとママみたいにボクも蛮民^{フラァー}を守ったんだ！」

きつと褒めてもらえる。喜んでもらえる。すごいねって頭を撫でくれるに違いない。そう思ってた自分の手柄をアピールしたのに、二人は顔を見合せて困ったような顔をした。

「……だめだった？」

「ううん、ダメじゃないよ。ちっともダメじゃない。ロックは優しいね。ママの自慢のとっても偉い子よ」

「だよね！ 間違ってるのはみんなの方なのに、ボクが悪者で

さ、ほんとあいづら最低だよ」

「それはね……それは、すごく難しいお話なの」

ママがボクをぎゅっと抱きしめる。長くてきれいな紅い髪が顔にかかって少しくすぐったかった。腕の中で温もりに包まれながら、なぜママはこんなに悲しそうにしているのか、その答えを見つげきれずにいた。

「良くないことをする人が、間違っているわけではないんだ」
パパの目を見る。パパは真っ直ぐにボクの目を見据えていた。いつもの優しいパパの目ではなかった。

——今にして思えば、それは一人の男としての目だったのだと思う。覚悟を湛えた強い眼差しがこの時のまだ幼かった俺を射抜いていた——

「ロック。お前は優しい。そして強い」

「……ボクは魔術下手だよ。剣もあんまりだし……」

「力じゃないんだ。心だ」

「パパはね、医者として色んな人を見た。色んな場所に行った。色んな営みを知って……同じような戦争を見た。——そうして学んだんだ。人の心は悪いものじゃない。美しくもある。ただ、脆く、弱い。生まれか、育ちか、環境か、取り巻く世界がそうさせる。『悪』っていうのは仕方のない摂理なんだと思う。人は間違ってしまう。自分の中の弱さに負けてしまう」

パパはボクの頭を撫でながら、優しくて強い、不思議な目を

していた。

なんとなく予感していた。まるで川の流れを別ち、行く末を変えてしまう大岩のよう。今から訪れる数瞬は、今から言われることは。ボクの一生にずっと残り続ける。それは多分——ボクを、

「ロック。お前が行こうとしているのは、陰しく辛い道だ。道しるべは自分の正義だけ。自分を信じて歩いて之ける強い者にしか許されない道。……ロック。私はお前を誇りに思う。誰より気高い道を選んだ私の息子を何より誇りに思う。だから約束してほしい。強いお前はみんなの弱さを許してやりなさい。弱さは悪じゃないんだと、優しく許せる人になりなさい」

「……うん。分かったよパパ。約束する」

それを聞いてパパは満足したように頷いた。優しいいつものパパの目をしていて。思い残すことは無いという風にさえ見え

た。
なんとなく予感していた。この言葉は、ボクの一生にずっと残り続ける。それは多分——ボクを一生苦しめる。

俺がこの時確かに感じていたのは、『嫌な予感』だった。

「何だか外が騒がしいわねえ」

ママがそう言ったのはデザートのケーキを切り分けていた

時だった。

「なに、気にすることはないさ。ここは塞地だ、多少の揉め事は甲冑を脱いで酒を飲んでる騎士様たちが喜び勇んで正義執行してくれるだろうよ」

そして明日の私の仕事が増えるのさ、とパパが笑って言った。しばらくもしない内にまた静かになった。ほらね？ とパパが言った直後、コンコンと扉が叩かれた。

「もしかして、あの子かな？」ボクが嬉々として言うのと、「そうかもしれない。私が出よう」とパパが席を立てて玄關に向かった。

「あの子って？」と、ママが尋ねる。ボクが「今日助けた蛮民フラーの女の子！ パパが困ったら来なさいって、住所渡してたの」と無邪気に答えている。

——嗚呼、もう夢が醒める。終わってしまう。

「あれ、でも夜は門が閉まるから、蛮民は塞地に入れないわよ？」
フラー

ドンドンと扉を叩く音が家に響く。終わりの足音が響きわたる。ここから先は、悪夢だ。

まず扉を開けた。パパの、首から上が消えた。頭は天井や壁に

何度も跳ね返って、体は噴水のような血を噴き上げて天井を汚しながらそのまま後ろに倒れていく。

倒れることさえ鈍い、と言わんばかりに倒れる途中のパパを踏み倒して侵入した男は、ママの前で何かの光を閃かせた。

そうしてママは座ったまま胴体が斜めにズレて、半分ドチャリと床に落ちて、死んだ。一瞬で全てが終わった。

体の半分が赤黒く染まった大男としばらく見つめ合っていた。男の右手には朱紅く染まった大太刀が握られていた。大太

刀の鋒きつぎから雫が落ちて、ママが作った血溜まりに波紋を落と

して、その一定間隔の音がやけに大きく聞こえていた。やがて開きっぱなしの扉から外の怒号が聞こえてきた。大勢が口々に何かを叫んでいて、本国語しか分からない当時のボクには何を言っているか理解できなかった。ただ、怒りだけが言葉を超えて理解できた。

「坊主。憎いか」

男が地を這うような低い声で問う。現実を処理できていない子供の脳は既に親から貰っていた答えを口舌に送った。

「パパが……弱さを許してやりなさいって」

男はしばらく黙って立っていた。そして、何も言わないまま

我が家を出て行って、扉が閉められた。

空の際が白み始めた頃、男は戻ってきた。もはやほぼ全身が赤に濡れていた。辺りはまた静かになっていた。自分の席に座って放心したままだったボクは、大太刀を背中の中納めた男に手を引かれて外に出た。

凄惨。外の光景を表すにはその一言に尽きる。毎日見ていた変わり映えのしない居住区の退屈さは一夜にして吹き飛んでいた。

お隣の助祭様の家では、外の窓べりから奥さんがこちらを見ている。その下にあるべき続きはなく、本来の位置よりだいぶ下を捜してようやく、外壁に縋り付いて首の断面を空気に晒している続きがあった。

お向かいの家の玄関には昨晚野次を飛ばした二等騎士のお

じさんが腰から上の無いままで立ち続けていた。下半身^{それ}がおじさんだと分かったのは、玄関から少し離れたところまで血とこぼれた臓物で一本道を生み出しているもう片割れのおじさんが居たからだ。

もう半分の自分が立ち尽くしたままでいるのに気づいていなかったのだろうか。怯えた表情でそれでも前に手を伸ばして、

数メートル築かれた赤黒の道はそこで終わっていた。

ちらほらそのような死体もあったが、大通りは基本的に綺麗なものだった。しかし道行く中で家々のいくらかは、カーテンの代わりに窓が黒く染まっていることに気づく。

居住区に均等に並ぶ同じ間取りの単調な白い家は、そのまま死体の入ったシンプルな量産型棺桶に早変わりしていた。

外から中が見えなかったのは幸運だった。どうせ棺桶の中身はどこも似たような惨殺現場に違いないのだ。それを見飽きるなんてのは最悪だろう。——いまがまだ、最悪でなければの話だ。

しかしそれは前だけを見て歩いた時の話だった。家の玄関の扉はみんなして通りに向かって開け放たれているのだから、もしボクが気まぐれに視線を横にズラそうものなら、パパと同じように扉を開けた瞬間殺された風の死体が「なんで死んでいるんだ？」と言いたげに顔もないままにボクを見ていただろう。あるいはそれは「なんで生きているんだ？」か。

地獄の一丁目とはこんな感じなのだろうか。まだ帝国本土に住んでいた頃の、騎士団の凱旋パレードを思い出す。

沿道の人垣から歓声を伴って輝く騎士たちに注がれるいくつもの視線。

これは、それに似ている。道の両脇に佇んで死んでいる彼女らの視線を一身に受けて、その間をボクらの行進は進んで

いく。

ボクの首は固まって、前に延びる道のタイルしか見ていない。だからこの行進のオーディエンスがどのようなものであるかをボクは知らない。けれど視線を感じていた。

首が無いみんなが並んでボクを見ている。顔が無いのにニッコリ口角を吊り上げている。腕が無いのに拍手をしている。声がないのに歓声を上げている。

ボクらの地獄の行進をみんなが観覧して笑っている。これから始まるボクの芥ゴミのような宿命じんせいを嗤わらっている。

ようこそ地獄へ。そんな祝福のろいを聞いた。

塞地の門は門番こと腰の高さで斬り揃えられていた。門の断面の上を跨いで塞地を出る時、後ろを見た。

ヒノモト州に派兵されたほぼ全騎士の集う、天高く聳える円柱状の大城塞。戦争で平らにされたこの州では、現在最も大きな建造物。それがまるで竹みたいに斜めに斬り落とされて朝の風に吹かれていた。

朝日が山から顔を出し、塞地を後にするボクらを照らす。男は相変わらず無言でずんずん歩いていく。

ボクは背中では塞地そのものが、これまでのボクの世界がゆっ

くり息絶えていくのを感じながら、手を引かれるままにフラフラ歩いた。

やがて男は山の中に入っていつて川で身体と刀の血を洗い流し、木の枝に結んであった風呂敷から着物を出して着替えた。「お前も血を洗い」

男がそう言ったのを聞いて初めて、この蛮民フラーの男が流暢な帝国語で話していることに気が付いた。ボクが呆けたままでいるとため息を一つして、風呂敷の包みだった布を川で濡らし、それでボクの顔を拭いた。自分の顔に血がついていたことはその時まで知らなかった。

それが終わると男は汚れた着物と布を一纏めにして、その上に懷から取り出した木の葉を乗せた。

いくら未熟と言えど、魔術の教育をエリート校で学んだ身。魔術の基本、霊力の知覚くらいは習得している。霊力そのものの塊が光り輝いているのかと見紛うほどに、木の葉は尋常ならざるエネルギーをその薄っぺらい体に秘めていた。

「***」

男が自分の顔の前で印を結び、短く何か聞いたことのない呪文を唱えた。すると木の葉に閉じ込められていた霊力が一気に解放された、かと思えば、一抱えほどの濡れた布のかたまりが同じ大きさの炎に変じボウッと燃え盛った。

あらかじめ霊力を保存しておいて、使いたいときに解放している。教科書で見たことのない魔術。帝国の魔術体系とは全く異なる発想。炎は上に乗っていた木の葉を瞬く間に焼き尽くし、しかし他に燃え続けるための燃料もないので、熱気が肌に到達する頃にはもう維持されることなくほんの一瞬だけ輝いて、そして消えた。

それからまたしばらく手を引かれて歩き続けた。男の住み家はかなり分け入った山の中腹にあった。

男が家の戸に手をかける前に戸がガラツと横に開いて、飛び出した女の子が勢いよく男に抱きついた。

「*****！」

と現地の言葉で嬉しそうに何か言ったあと、その後ろにいたボクに気が付いて目が合った。

白い女の子だった。フラー蛮民なのに黒髪でなく、雪のような白銀

の長い髪なのが目を引いた。ボクと変わらないくらい背丈で、肌も透き通るように白く、着物も白地に淡い水色で染め抜かれた、一目で上質なそれと分かるものだった。ああ、大事にされている子なんだ、と思った。

男が女の子の頭を撫でて何か言っていると、その子は輝く笑顔を見せて、勢いよくボクの手を取ってブンブンと振りまわした。そ

れから予想外に力強く家の中へボクを引っ張り込むものだから、よろけて家の中に入ってしまった。

そうしてボクは、この日からこの家の子になった。

背後で戸が閉まった音がして、もうボクの知る昨日までの日々はどこにもないこと、新しい世界の新しい自分しかボクにはもう残されていないことを悟った。

——教えられた常識は死んだ。学んだ良識は殺された。何も分らない。何が正しくてどうしたらいいのか分らない。

もう自分が何なのかも分らない。何もかも分らない。グチャグチャのズタズタに原型の残らないほどに「ボク」は破壊された。「ボク」を構成していた全てが殺された。

その後に残るのは虚っぽで、虚っぽから吹いてくる風は酷く

冷たい。つめ冷酷たくて心寒い。こんな悪夢耐えられない。消えたい。死にたい。こんなの、外は生きながらにして内は死んでいるようなものだ。もう、終わりにしてしまいたい。

これは、俺が世界を滅ぼすまでの物語。

それでも。

それでも生きていかなきゃいけない。生き残ってしまったのだから、生かしてもらったのだから生きねばならない。

死ぬ権利はもう俺には無い。俺に残ったのは生きる義務だけだ。死なんて贅沢はもう俺には許されないものになった。

ならばどうする。どう生きる。自分さえ持たぬお前は何者になるのだ。俺は自分に問いかけた。なあ。何がしたい。

虚っぽが言った。

「強くなりたい」

薄皮越しに朝日を感じて、俺は夢から醒めて瞼を開けた。



主銃関係

中距離弾道炒飯

壇上に飾られたあいつの顔は、ひどく見覚えがないように思えた。周囲を彩る供花が、それに拍車をかける。お前、花が似合うような奴じゃなかったろ。こんな厳肅な雰囲気が好きなのでもなかった。

二ヶ月前にうちの隊に配属された男。この二ヶ月間、おれと同僚だった男だ。

「すみません、兄の戦友の方でいらっしゃいますか……」

話しかけてきたのはあいつの妹。今回の喪主だった。妹がいるという話は聞いていたが、会うのは今回が初めてだ。

「ええ、そうです」

こういうとき、どんな話をすればいいのやら。「あなたの兄貴

即席爆破装置

は作戦行動中に注意を怠りIEDに見事引っ掛かっておれ目の前で死にました」とでも言ってやろうか。

「――失礼。隊長を務めている者です。今回の件、心からお悔やみ申し上げます。彼は非常に優秀な人材でした」

隊長が割って入ってくれたおかげで、おれは事なきを得る。部隊内での彼のコールサインは「サボリ魔」であり、その由来

は日頃の彼の行いだが、たまにはいい仕事するもんだ。

「彼は人一倍仕事熱心で、困難な任務にも臆することなく従事してくれました。うちの隊ではまだ新入りでしたが、将来を有望視する声も多く……大変、残念です」

妹は沈痛な表情を浮かべ、サボリ魔の話に傾聴している。明らかに、彼女はおれが苦手とする人種だった。聞くところによると、有望株のお役人なんだとか。自分の兄がどんな奴だったのかまるで知らないのか、知っていながらなおサボリ魔の話に聞き入る振りをしているのか。たぶんいや間違いなく、後者だ。

最も、隊長も隊長で、彼の発言は「俺は悪くねえ、あいつが勝手に死んだだけ」と換言可能だが。

焼香に並ぶ列は長蛇で、その大半はあいつの知り合いではないのだろう。妹の客だ。つまりここは政治やら駆け引きやらの場であって、死者を悼む気のある人間なんて、ハナからいないのだ。「お前、妹いるんだって？ 今度紹介しろよ」などと軽口を叩くこともあったが、こんな奴だったとは。あいつとはまるで似ていない。

あいつは問題児で、優秀な兵士を気取ったマヌケで、命令違反の常習犯で、銃で人様の頭吹き飛ばすのが大好きなクズ――これに関しては、おれや他の仲間たちも同じだが――だったが、楽しい奴だった。何度、隊から蹴り出したいと思ったか、もう覚えちゃいないが。共に死線を掻い潜った仲だ、断言できる。

あいつはこんな式、望んじやいなかっただろう。妹だって、それは理解しているはずなのだ。

だが奴は死んだ。この世は生者だけのものだ。奴の死を妹がどう利用しようと、奴に文句を言える筋合いはない。

おれは少し疲れて、外の空気を吸いに出る。

「あ、葛城先輩」

そこにいたのは隊の一人、姫川だ。ふかーっと煙を吐きながら、

「あんた吸わないでしょ。何しに出てきたんです？」

「吸いにきたんだよ。外の空気をな」

「ああ。先輩、ああいうお堅い空気、苦手そうですね。それとも何です、感傷的にでもなっちゃいました？ 似合わね」

姫川はケラケラ笑いながら、吸殻を携帯灰皿に放り込み、次の一本を咥える。

「葬式なんて下らんとした、それだけだ」

「当たり前じゃん。生きてる人間の為のもんですから、葬式なんて——それでもって、私もあんたも、生きてる人間になんて興味ない。違いますか？ 私らが大好きなのは、今まさに死なんとしている人間、私らに頭ブチ抜かれようとしている人間、私らのスコープの中に捉われてしまった人間……。つまりこの手でぶつ殺していい人間、それだけです。死んだ人間にだって、なおのこと興味ない。あの問題児クンも、同じだったんじゃない

いすかね」

姫川の評は、概ね的確であるように思えた。なんだか癪だ。「なんだよ、えらく饒舌じゃんか。お前こそ感傷的になつてんじゃねーの」

「……」

「……」

「……」

マジかよ。

「……お前が責任感じることは無エ。ケチな傭兵会社に入ったときから、あいつだって覚悟はできてたはずだ。おら、元気出せ」

さつきまでのカラ元気はどこへやら。姫川は無言で煙草を咥え続ける。

「あいつは指示を無視して単独で突出した。お前の指示がマズかった訳じゃない」

「……」

姫川は特定の銘柄にこだわらず、いつも違う煙草を吸っている。今日の副流煙は、香料どっふりでやたらと甘ったるかった。なんとなく、こいつにはこんなの似合わないと思った。

「考えられる限りで最良の作戦指揮だったと思うぜ」

「……」

「それに、まあ、アレだ。古来、戦場で兵を失わなかった指揮

官なんているもんか。通過儀礼つてもんさ」

姫川は左の人差し指と中指の第二関節あたりで煙草を挟むと、口を開いた。

「……うるさいですね。先輩は私の命令に従ってればいいんで

す。あんたは犬野郎です。戦争の犬なんです。それが指揮官に

偉そうな物言いをするなんて」

煙草は、灰の部分がもう随分長くなっていた。

「犬は素敵な生き物だぜ？ 飼い主が落ち込んできると、励まそうとするもんだ」

「……私は別に求めてません。そんなこと、犬に」

「あら、そう」

灰が落ち、姫川の喪服を汚す。

姫川はいつも、左の指で煙草を持つ。薬指と小指を握り込み、親指は少し反らしてスラツと。軽く伸ばした人差し指と中指に、煙草を挟む。

「……一本吸います？」

「いや、おれは喫煙者じゃない」

「それくらい知ってますよ」

「……」

「……」

「なあお前、もしおれが死んでも、今日みたいに凹んでくれる

……？」

「うっさいばか」

「……」

「……」

「……」

「……死ななうくださいよ」

馬鹿言うなよ。お前の指揮に従ってる限り、おれは無敵だ。そう思ったが、言わなかった。

サボり魔が隊の指揮を姫川に一任するようになって、もう随分経つ。姫川指揮下での殉職者は、例の問題児クンが初だった。

「さあ、さあ、さあ！ 社畜ども、仕事の時間ですよ」

作戦会議室に入ってきた姫川はもういつも通り、元気に声を張り上げる。昨日の陰りはもう見当たらない。

「今回の仕事は、久しぶりに楽しめそうですよ——まっ、ケチな仕事に変わりはありませんがね——。逮捕ではなく、襲撃です」

昔ながらのパイプ椅子に腰掛けた戦闘員たちは、明らかに浮足立つ。

「いつもおん。じゃ、アソ市警の行政代理執行じゃないってことスよね」

「はい。今回の仕事は、本社の上層部からの命令です。なんでも、大株主の一人が何者かに強請^{ゆす}られてるんだとか。で、脅迫メールの『』を辿ったら、その犯人はこのアソにいたようです。それでアソ支社の我々にお鉢が回ってきた訳です。その犯人どもを暗殺するのが、今回の任務です」

「標的は何者ですか」

「違法な廃品回収業者。まつ、チンピラとも言いますがね。ヤクザの子請けか孫請けの、雑魚雑魚な連中です。ウカツにも我が社の大株主と知らずに手を出したようですね」

「運の無エ奴らだ」

「他に誰か質問は——ってか、今ので任務の内容はば説明しちゃったけど」

隊の中では、姫川はかなり若い方だ。同時に、かなり腕が立つ方だ。配属後、彼女は恐ろしい勢いで実績を重ねていった。

ずんずん切り込んで行く歩兵^{ポーン}。敵陣の最奥列^{ランク}に到達するのに、

そう時間はかからない。彼女は優秀な前線要員だった。えてして、若く優秀な戦闘員は独走しがちであるが——件の問題児クンもそうだし、おれも以前はそうだった——おれが知る限り、

姫川が独走したことは一度もない。彼女は常に盤面全体を見据え、二手三手先まで考え立ち回る。サボリ魔のオッサンは、彼女の指揮官としての素質をたちどころに見抜いた。姫川に隊の指揮を任せれば、自分が楽できると踏んだのだ。

こうして彼女は、隊の指揮官代理となる。歩兵^{ポーン}から女王様^{クイーン}に成ったのだ。

「はい、はい。ヤクザ傘下の連中を闇討ちって、マズいんじゃないの。何かの拍子に、抗争の火種になりかねないよ……」

この質問は、狙撃手のホアンだった。隊長の次に古株の彼女は、アジア各地の戦場を渡り歩き、三ヶタ人の頭を吹き飛ばしてきたらしい。

「ホアン先輩、あんたそんなこと気にするようなタマじゃないでしょ」

「だって、後で責任問題になったら嫌だよ。あたしはここが気に入ってるんだ、どっかに飛ばされてもしたら……」

「私たちがしくじらなければ、我が社の関与はバレません。この作戦は機密に指定されており、作戦成功後、あらゆる記録は破棄されます。作戦中、ボディカムや視覚のRECも無しです。それに……」

「それに？」

「……ヤクザどもが抗争おっ始めたら、私たちの仕事が増えま

すよ。今回より、もっと派手なのがね。殺しまくりです、嬉し
いでしょ？」

犬どもは涎を垂らし、尻尾をブンブン振る。

『皆殺しの雄たけびを上げ、戦の犬を野に放て』！ シェイク
スピアの『ジュリアス・シーザー』、第二幕——それではクソ犬
ども、仕事のお時間です」

サブマシンガン

短機関銃を構える。前進。射撃、そしてまた前進。凸形の

フロントサイト

リアサイト

照 星と凹形の照門が一直線に並ぶ。出来上がるのは、チェ
スのルークみたいな形だ。ルークの正面に座するのは、無論、
標的の頭。引き金に指をかける。四・七ミリ弾が直進する。そ
してルークは、また前進。敵のターンは訪れない。我が方が一
方的に前進、蹂躪するのだ。

サプレッサー越しの銃声。空葉莢がアスファルトに落ちる音。
どんなバンドのギターよりドラムより、おれを昂らせる音だ。

カ・イ・カ・ン——。

古い映画に、そんな有名な台詞があるのだそう。女子高生
が機関銃をぶっ放す映画らしい。「だそうだ」「らしい」という
のは、つまりおれは当該の映画を見たことがないのである。姫

川から聞いた話なのだ。奴は、古い本やら映画やらが好きだ。
ともかくとして、機関銃をぶっ放すことが快感だってことは、
疑う余地もない。

ボルトが解放され空葉莢が吐き出される都度、おれの中の何
かも一緒に解放されてゆく。一発、また一発。

その弾丸で的確に標的を殺害できれば、なお良い。

この世で最高の感覚。

おれに何か、他人より優れた才覚があるとすれば。それは、
暴力の行使。

銃でもナイフでも、ステゴロだって、何でもござれ。誰だつ
て殺つてお目にかけよう。おれはいつだって、この能力を発揮
したくてたまらないのだ。

問題は、その機会をどう得るかだ。

如何に天才的なチェスプレイヤーでも、チェスの試合に出な
ければ、その才を充分に発揮することは叶わないだろう。チェ
スプレイヤーであれば、自分の才を発揮するのに最適な試合は
どれか、自分で選択することができるが——生憎、おれたち兵
隊はそうはいかない。命令が無いことには、おれたちは戦いに
ありつけないのだ。

局面に応じて適切な作戦指揮を行える指揮官は、そう多くは
ない。要員各人の能力を無駄なく最大限に活かせる指揮官とな
れば、猶更だ。

つまりそれこそが、姫川の凄まじい点。

おれの才能が暴力を行使することだとすれば、奴の才能は、暴力を行使させることだ。あいつの指揮の下で動けば、いつだって、おれはおれの能力を十全に発揮し満足に戦うことができる。

命令を。

ルークは前進する。

クイーン、おれに命令を。

「……」

「……」

「……葛城先輩、吸わないでしょ。何しに出てきたんです？」
「お前の様子を見に来たのさ。もうすっかり元気そうで、安心したよ」

「こないだの仕事は久々に楽しめましたからね。負傷者も出なかったし、私の作戦は完璧でしたから——でも、先輩がもし私を心配してくれるっていうなら。今から昼飯、奢ってくださいよ」

「そりゃ構わんが……」

「決まりですね。あの屋台がいいです」

姫川は、社屋の目の前のボロい屋台を指差す。得体の知れん

材料使ってるが、安い上に社食より美味いと、弊社の面々に人氣の井屋だ。時折、食中毒患者を出している。

「いいのかよ、せつかく奢りだつてのに。あんな店で」

「いいんですよ。さ、行きましょう」

「らっしやい、何にしましょ」

「魚の丼二つ——先輩もそれでいいでしょ。あ、今日仕入れた中で、一番キモい魚使って欲しいんだけど。いい？」

若いサイボーグの女店主は、あからさまに怪訝な顔をしながらも、了承した。右手の義手から仕込み出刃包丁を展開すると、魚を捌き始める。

「……流石に意味不明なんだが。今の注文」

「あのね、先輩。これにはちゃんと意味があるんです」

「ほう、じゃあ聞こうじゃないか」

煙草に火をつけながら、姫川は話し始める。

「私の祖父は昔、猟師やってたんです。世界が発狂する以前、このアソの街が、こんな風になるよりずっと昔の話です。当時はまだ、日本政府は形骸化していなかったし、軍事や警察が民間委託されることもなかった、そんな大昔の話なんですけど。その祖父から聞いた話なんですけどね。」

「山には山の、神様がいらっしゃるらしいんです。ブツデイズムともシントーとも違う、民間信仰なんです。山を司る超越的存在で、猟師たちはその神を大切にしてきました。山で狩った獲物は、山の

神からの恵み。それで、その神様、どうやら醜い姿をしているんですって。猟師たちはしばしば、大猟や狩りの安全を祈願し、山の神に捧げものをしたらいいんですが。彼らは、醜い魚を好んで捧げたんです。山の神が、自分より醜い奴を見て喜ぶようにって。」

「ここ、アソの街も、もとは山林でしょ？ 今はコンクリートの密林。そしてあんたは猟犬。だから、験担ぎという訳です」魚を揚げていた店主は、どうやら姫川の話に聞き耳を立てていたようで、納得したような表情を浮かべている。

「その魚、おれたちが食っても意味無いんじゃないね。山の神に捧げるんじゃない……」

「おにーさん、細かいことは気にしないの。はい、おまちどおさま。井二つね。あと、おねーさん、うちの店禁煙だから」

井に乗った魚のフライは、確かにキモい形をしている。一体何の魚だこれ。

「来週に予定されてる作戦行動ですけど。アソ市警側の担当者がとんだマヌケ野郎で、事前情報にいろいろと誤りがありそうだって、サボり魔が言っていました。標的の連中、もしかしたら重武装してるかも知んですよ。だから私も、狩りの安全を祈つとこうと思ひまして」

姫川はあくまで、澄ました顔だ。狩りの安全、ね。こんなもの食べなくなったら、おれは死ぬ気は無いぜ。そう心の中で呟

き、井をかき込む。見た目に反し、悪くない味だった。

うつろひ

宵蘭

神様は人生ゲームが弱いらしい

壊れたパソコン四マス戻れ

先人の愛も死もみな黒板に品詞分解されてく日暮れ

児童書を捲れぬ右手に反吐が出る

「大人」の意味が噛み砕かれた

憧れてただ憧れて憧れて恋じゃなかった何かが終わる

もう二度と届かぬ人を留むためこの手の中に海を創ろう

ポラリスを掬ひ取りたい前籠が

ふらりふらりと漕ぎ惑ひたる

これしきの緩い指輪を許せずに

ぐーぱーぐーぱー繰り返す夜

乱されたぬばたま絡め巣をひとつ

黒い糸では小指じゃ済まぬ

言の葉を紫煙で巻いて今日もまた

タイトルコールのない夜明け

酒煙草ほどのやる気も無かりせば

ブルーライトで縮める寿命

スマホより星を綺麗に見れること今日の私の存在証明

彼の人と同じ桜が見れるなら写しの枝も愛しく思ふ



あとがき（作品掲載順）

小島遊隼世

「叶わなかったこと」は最高に美化されがちな気がします

明倉有斗

面接でどんな小説書くの？って聞かれるけどこれどんな小説？

霧雨 蒼

寒いと感じているのに「暑い」と口から出たとき、身体はどちらを訴えているのか分からなくなります

犧 まい

思い出だっけ。咀嚼しちやつて。

わゐん

昼夜逆転を病のように説明する。自業自得なのに。

午睡乃 ユメ

機嫌が良いので特にないよ

渡邊風葵

「あなたのため」が含む危うさに気をつけたい。

日々規

照らされた落ち葉がゲロに見えてびっくりした。

たゐし

第一志望の研究室に入れて嬉しいです！

くりや

なんで隕石逸れるんだよ就活せずに済むと期待したのに

中距離弾道炒飯

パク・フンジョン監督、『魔女』早く撮ってください

宵蘭

意味などはここに無ければありません

編集後記

わおん

『ラピスラズリ 2025 新歓号』はいかがでしたか。新年度、新学期、新生活、新入生歓迎らしい作品達……とは言えませんが、「これが文芸部セピアだぞ」と胸を張れる私達らしい作品達だったと思います。

さて皆さん、お久しぶりです。今回も編集を務めました、わおんでございます。本当は春休みが終わる頃には発刊したかったのですが、四月五月とずるずると先延ばしにしてしまい……。遅刻・欠席・提出忘れ。してこそ文芸部セピアであります。先輩達は優しく「まだいいよ」「そんなに急がなくて大丈夫だよ」とおっしゃってくださいましたが、そろそろやばいよという所までやって来てしまいました。本当に申し訳ございませんでした。

と、まあ謝罪も済んだことですし、新歓号らしく新入部員の方々について話そうと思います。新歓イベントでの部員の皆さんの頑張りで、セピアは今年大豊作でして、部室は毎日のように賑わい、人数の足りない部会の影はもう存在しません！ いやあ、ほんと、ありがたいですね。そんなありがたい新入部員の皆さんに、この場をお借りしまして、一言か二言か言わせて

頂きます。

大学生活が始まって早一年（ええ！？ もう一年！？）、日を巡るごとに「大人」という言葉が脳をよぎります。最近はどう反復横跳びしています。実家を出て、一人暮らしをして、バイトして、時間の使い方もお金の使い方も自分次第。残酷です。自分から動かなければ家で腐ってしまいます。だから何でもやってみてほしい。嫌なことも後悔するだろうこともしてほしい。ベーグル作ったっていいし、授業フルコマ受けたっていいし、一日中寝てたっていい。

これから、自分が思っているよりも世間知らずであると世間に思い知らされます。しかし世間は私達の無知を知りません。当たり前のように責任を郵便受けに投げ入れます。入りきらない大きさでも、ぱんぱんになっても入れてきます。だからできるだけ知っておかなきゃいけないんです。大学生は大人への移行期間で、大学は大人の養成機関です。今まで知らなかったこと、一緒に知っていきましょう。

一言二言のつもりがかなり長くなってしまいましたね。というわけで、ここまで読んでくださった皆さんありがとうございます。次に寄稿してくださいました部員の方々、ありがとうございます。新たな仲間達を迎え、セピアはさらに進み続けます。応援よろしくお願いします。

ラピスラズリ

2025 新歓号

【発行日】2025年5月15日

【発行者】文芸部

【本誌使用写真】部員撮影

☆文芸部(旧文芸サークルセピア)☆

【活動日】毎週月・金 18:30~20:00

【活動場所】全学教育棟2階 C211教室

【X(旧Twitter)】@Sep_1A

【Instagram】@bungeisepia

※Zoomにて活動している場合もあります。

年に4回、『ラピスラズリ』(本誌)を発行しています。

毎週の部会では、部員の作品の批評会や、リレー小説、シャッフル短歌や俳句や言葉遊びなどのレクリエーションを行っています。

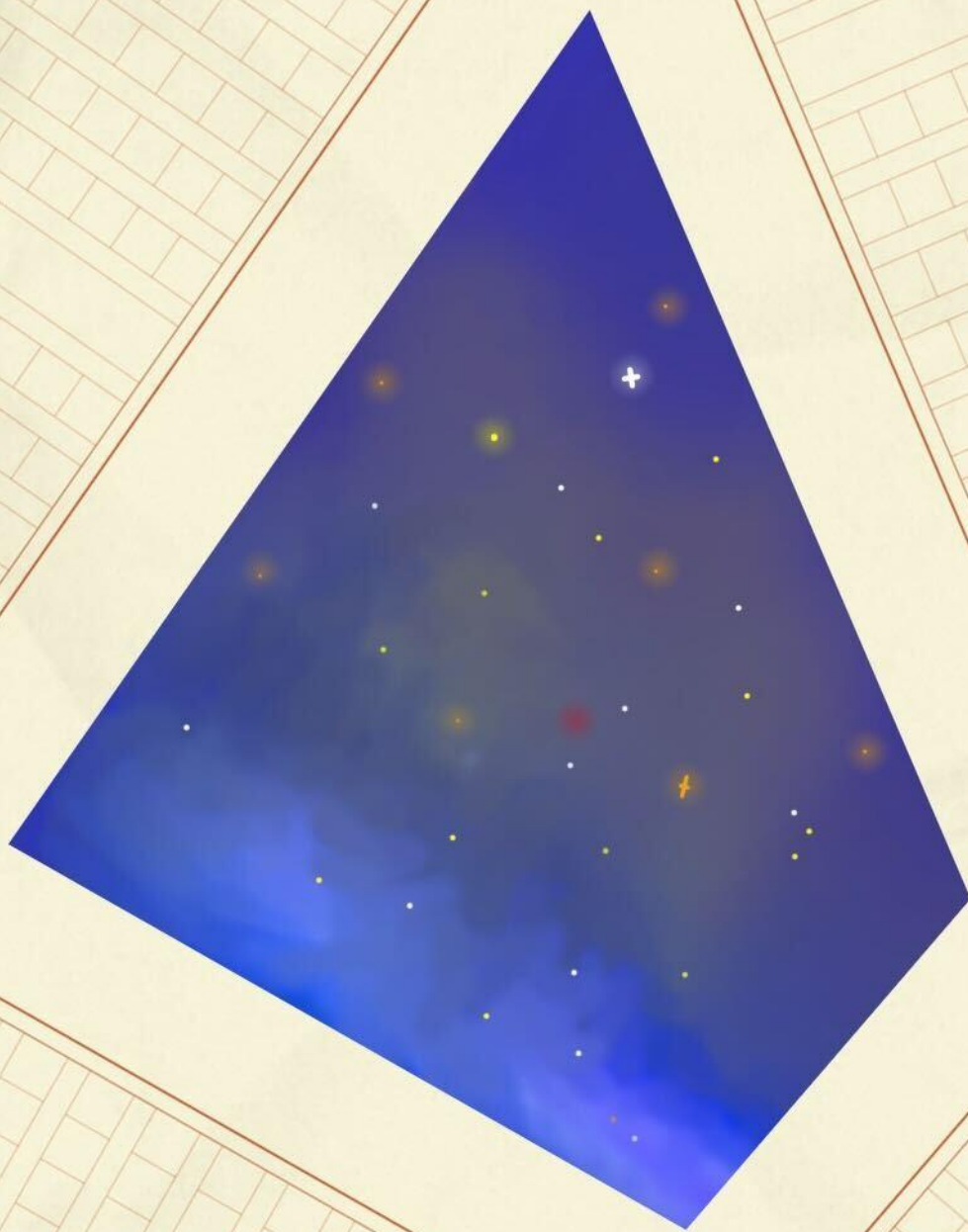
創作をやってみたい方は、小説・短歌・俳句・詩・絵本から評論まで、ジャンルフリーに募集中。

もちろん、自分では創作をやらない、一介の文学好きも大歓迎です。

「言葉について熱く語りたい」「好きな本についてまったり語りたい」「暇で仕方がないのでなにか面白い本を教えてください」……あなたのそんな秘めたる望みが叶ったり、叶わなかったりします。

最新情報はX(旧Twitter)&Instagramにて公開中。質問等はDMで。

見学お待ちしております。



Thank you for reading